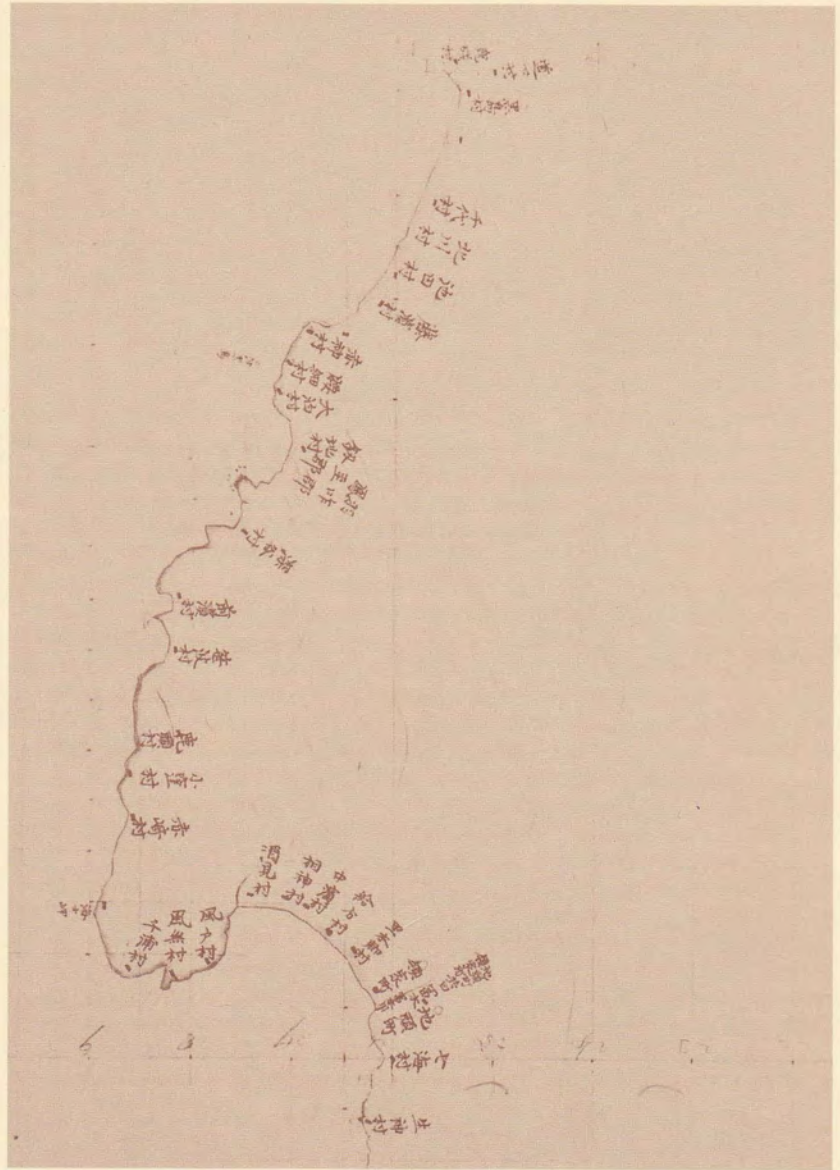


史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇七年 第五十号
継承通算五〇号記念号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 米国議会図書館蔵

伊能大図84号 能登島(部分)

平成十九年三月二十五日午前九時四十二分、表紙図の銅地村沖合い、深さ約十一キロの日本海を震源地とする、石川県下では過去最大M6.9の能登半島地震が発生した。二百四年前に伊能測量隊が見た沿岸の家並みが一瞬にして崩れた。

享和三(一八〇三)年七月五日、第四次測量隊は今浜村から手分測量に入った。忠敬ら五名は所口(七尾市)へ出て半島東海岸を、平山郡蔵ら三名は北上して西海岸を測った。数年前、郡蔵たちの休泊所だった家々を訪ねてみた。風無村の畑中家、鹿頭村の木下家は存続していたが、銅地村の清兵衛宅は草地と化し、黒島村の森岡家は家屋は残るものの、子孫は他出して墓参に帰るのみとのことだった。道下村は地震被害が最も大きかった地区の一つで、河口付近には、現在、仮設住宅が建ち並んでいる。表紙図は鹿磯村で終わっているが、その北には、郡蔵が「これより難所」と記した深見村がある。地震による崖崩れで陸路が遮断され、住民は船で避難した。さらに北の猿山岬灯台では、灯器が破損し仮灯で運行している。

高齢化した被災地の復興は課題が多く、故郷を離れる人も出ている。八月一日現在の黒島地区は世帯数二百二十八。『測量日記』には黒島村の家数は三百五軒と記されている。江戸時代の三、四倍に人口が膨らんだ日本だが、能登の人口は確実に減少してきた。今また、地震が過疎化に拍車をかける。平成十年十月、鹿磯漁港で中国人の集団密入国事件が起こった。沿岸部の人口が減少すれば危険性はさらに高まる。沿岸に人々が住み続けなければ国を守ることはできないという認識をもって、地震復興対策や地域格差是正に取り組んで欲しい。狭い国土に棚田を造成し塩田を開いて、自らの生活と国の基盤を支えてきた人々が、測量手伝というリレーでつないで描いた二百年前の日本の姿が「伊能図」だと思ふ。

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

河崎 倫代

目次 50号

巻頭 通算五〇号を記念して

一步一步一夢と歩く 夢を伝える

『伊能忠敬研究』五〇号を回顧して

『伊能忠敬研究』五〇号を迎えて

めまぐるしい十年、いつの間にか五〇号

編集の思い出

特集 佐渡研修旅行遊学の記

佐渡旅行に参加して

芳名録

話題Ⅰ

石井夏海・文海旧蔵の古地図を管見する

真崎甚三郎 中井光次

話題Ⅱ

研究ノート

『西日本測量と絵地図』と講演会

『地図展2007「富山」行ってきました

追悼

伊能大図総覧の地名と景観(四)

追悼 大友正道さん「しめなわ百科」

シールト事件の背景と間宮林蔵(二)

九州支部だより

忠敬先生関連の或る古書をめぐって(二)

和算の人脈(二)

九州支部例会報告

第五回「伊能忠敬献花の集い」

忠敬談話室だより

お便りから日々の話題 お知らせ

表紙図解説 河崎倫代

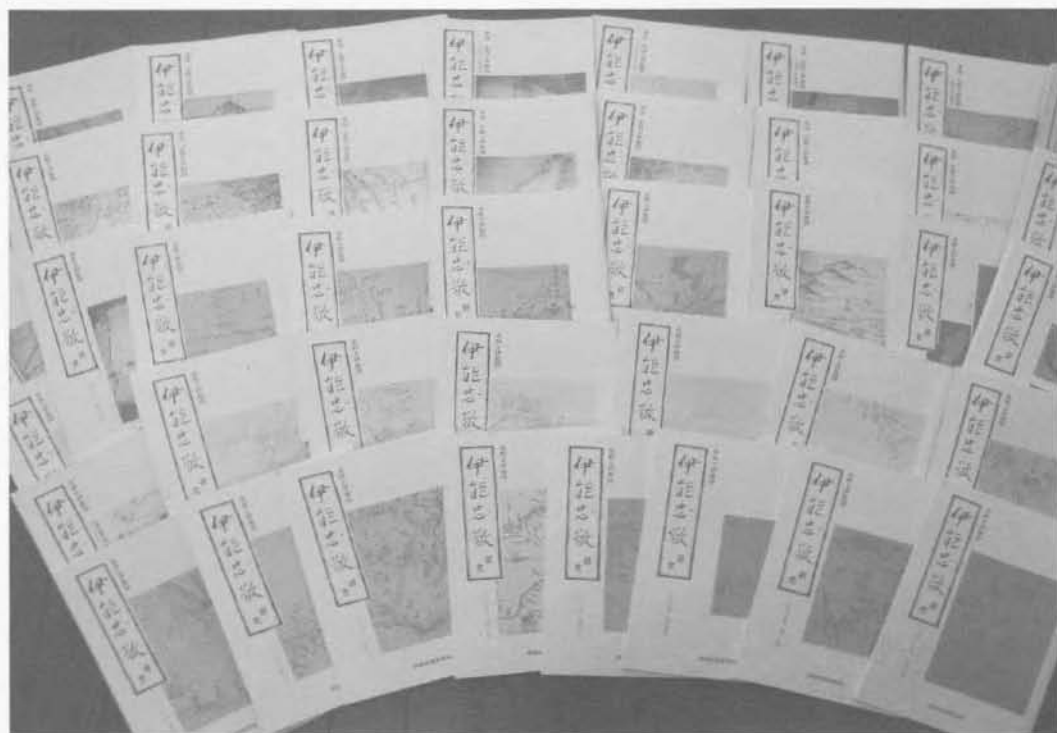
渡辺 一郎	二
星 塾 由尚	七
伊能 洋	八
伊能陽子・福田弘行	九
山本 公之	一〇
中川 幸子	一四
高木崇世芝	一八
伊能 陽子	二〇
編集 部	二二
伊藤 栄子	二四
齋藤 仁	二六
河崎 倫代	二七
佐久間達夫	二八
星 塾 由尚	三七
福田 弘行	四五
大谷 恒彦	四六
秋間 実	五四
安藤由紀子	六〇
辻本 元博	六六
石川 清一	六八
石川 清一	七〇
編集 部	七二

会報五〇号記念

忠敬の夢と歩く

忠敬の夢を伝える

一歩一歩



『伊能忠敬研究』五〇号を回顧して

伊能忠敬研究会名誉代表 渡辺 一郎

伊能図探究会から伊能忠敬研究会へ 伊能忠敬研究会の前身、伊能図探究会を家内と二人で始めたキツカケは、旧制中学同級生で沼津の開業医だった望月君が出していたミニコミ誌だった。

こういう趣味生活もあるんだなと思ひ、関心を持っていた伊能図のことを書いて、A3版二つ折り二枚、八頁のパンフのようなもの(?)を作ってみた。そして勝手に古地図の勉強会で知り合った人たちに配り始める。部数は五〇部くらいだったろう。

若い頃、先輩が毎月、葉書一枚の雑誌(?)を知人に配布するのを知っていたので、あまり抵抗感はなかった。

フランスで中図を発見、伊能家との出会い 色々伊能図を見せられて、レポートしていたのだが、フランスに伊能図があることを知って、金窪氏から資料をもらい、アポをとって訪問したところ、針穴が完備した最上級の伊能中図に出会う。

ビックリしたが、朝日新聞がバリ発で「ひと欄」の記事にしてくれた。これを見た伊能陽子さんから電話がかかり、世田谷で安藤由紀子・伊能陽子組が古文書整理中、難渋していた伊能図の下図類を見ることがになり、伊能家との付き合いがはじまった。

ペイレ中図の佐原展示会 いっぱう、フランスの中図を日本でぜひ展示したいと思ひ、佐原市教育委員会にお願いをした。いま研究会佐原支部長の香取氏が教育次長をしており、御尽力をいただいで一九九五年一月一七日から三日間の展示会が実現した。

あとからペイレさんに聞いたところ、地図の由来を色々調べたが、さっぱり分からない。佐原は伊能の出身地というので、何かわかるかと思つて、承諾したのだとのこと。

ささやかな展示会だったが、日経と朝日、NHKが大きく扱ってくれて、三日間で三、三〇〇人と、予想外の入場者があつた。

研究会発足「伊能忠敬研究 第七号」を発行 展示会をキツカケに、会費をいただいで研究会を作ろうということになった。芳賀さんに、三年持てば大丈夫だといわれ、三年分の費用約百万円を、安藤、伊能、清水、斉藤、芳賀氏および渡辺で拠出して発足した。

伊能図探究からの継続で、伊能忠敬研究会の会報は七号から始めることにした。デザインなどは芳賀氏を中心になって、伊能陽子さんたちがまとめたものだ。いまも原型は変わっていない。会報七号の発行日は一九九六年三月一日だった。

私は「研究会はいつからやっているのですか」と聞かれたとき、七号の発行日を答えることにしている。

清澄庭園で第一回例会、富岡八幡から間宮墓まで歩測 研究会ができたのだから、何か行事をやらなければ、ということになる。

富岡八幡宮に集合して、歩測教室を開き、間宮林蔵の墓まで歩測大会。歩測教室の先生は新沢君。歩測大会では浅井さんが名人に入賞した。名人 第一号である。

現在、日本ウオーキング協会が各地で整然と歩測大会を開いているが、ここが出发点だった。例会模様は九六年第九号(前田幸子)。歩測データの解析は、九七年第一〇号(岩田重雄)に掲載。

江戸東京博物館に「伊能忠敬展」を提案 一九九六年八月、例会を仲間うちで、やっているばかりでない方がいいな。世間に情報発信しよう。東京で展覧会ができないかな、というアイデアが出て、渡

辺一郎・齋藤仁組で、江戸東京博物館に正面から企画提案をした。展覧会の企画は、ふつう三年くらい前に決定する。一月になって内定通知を受けた。最近の展覧会企画の難航振りと比較すると、夢のような話だった。大ニュースである。

まさに情報を作っているのだが、関係機関が正式発表するまで、会報の記事にはできない。情報の発信源にしながら、会報記事にはできない矛盾を、このあとしばしば体験する。

伊能ウオーク催行決定 江戸東京博物館の伊能忠敬展内定をうけて、日本ウオーキング協会（当時歩け歩け協会）から伊能ウオークが提案され、共同して朝日新聞に働きかける。伊能ウオークの成立は、九九年第一八号だった。この企画決定も約三年前だった。

気象庁で伊能大図四三枚発見、国会図書館へ 鈴木純子氏により氣象庁で、明治期に模写された伊能大図四三枚が発見され、大ニュースとなった。（九八年第一五号）伊能忠敬展、伊能ウオークの強力な援護射撃となった。朝日新聞では伊能ウオーク担当の堀田記者が努力してくれた。

江戸東京博物館で伊能忠敬展開催 イギリス伊能小図三枚を招聘し、新発見の国会図書館大図の一部も展示された。直前になって都立中央図書館の伊能小図二枚も確認、展示されて会場を盛り上げた。（九八年第一五号）

一六号では「伊能忠敬展」の関係から、日本史界の大ボス・児玉幸多先生、随筆家・秋山ちえ子さんから巻頭エッセイをいただいた。NHKの「堂々日本史・伊能忠敬」について役員の放談会も掲載。

江戸博の伊能忠敬展入場者数は、一一一、三九九名。研究会編の図録は、九、二五九冊を最終日前日に完売。購入率八・三％は空前の好成績だった。

江戸東京博物館から伊能ウオーク出発（一九九九年一九号）いよいよ伊能ウオークが江戸博の出発式場から進発したが、出発模様の記事が無いのは残念。ウオーク関連の業務が錯綜し、業務の中心にいる渡辺に、書く余裕がなかったのが原因だった。

渡辺代表は総隊長として出発挨拶。新沢会員と大庭会員はサポート隊として車で随伴した。一九号になって、ようやく福田、窪谷、渡辺でウオークのリポートを掲載。

小島一仁氏の連載「伊能古文書教室」 始まる 九九年の第一九号「伊能豊秋日記」から小島氏の連載が始まった。「佐原邑河岸一件」「家謀」「旌門金鏡類録」まで一九回掲載された。超力作で、後世に伝えなければならぬ資料である。まとめてオンデマンド出版を考えており、小島氏の了解もいただいている。

佐久間達夫氏の「伊能忠敬江戸日記」連載開始 九九年第二一号から江戸日記の連載がはじまった。〇三年三一号で完結したが、貴重な史料で、伊藤栄子氏にも校合をお願いし、伊能忠敬銅像建立報告書保存版に掲載して、全国主要図書館に配布した。オンデマンド出版も考えたいと思っている。

新国立劇場で演劇「伊能忠敬物語」上演（二〇〇〇年第二二・三号）一九九九年一月一〇日から二七日まで、新国立劇場で加藤剛主演による「伊能忠敬物語」が上演される。二三号の巻頭に、加藤さんの原稿をいただいた。忠敬の演劇化は始めてだったが、伊能人気に乗って開幕前に、二二公演の全席完売となった。

NHK「お正月時代劇」で伊能忠敬を放映 演劇は成功したが、俳優座から映画の話はなかなか出なかった。

お金を集めて、教養映画を作る運動でも始めるかな、と考えていたところ、二〇〇〇年八月頃NHKから「お正月時代劇で伊能忠敬を取

り上げるので御協力を」という依頼があった。(二〇〇〇年第二四号) あとから聞いた話であるが、この企画は佐原市の鈴木市長(当時)がNHKの海老沢会長(当時)に「大河ドラマ」をお願いしたところ、

「大河は無理だが、お正月時代劇なら」と実現したものという。鈴木市長と海老沢会長の両方から聞いているから確実な話である。

ドラマの台本は、渡辺と江戸博の竹内館長で、深夜までかかつて考証したが、変えられない部分が多く、満足な出来ではなかった。

それでも視聴率一〇・二を稼いで、翌々年の大河候補(順位は低い)になったのだから、一定の効果はあったといえる。

第二次伊能ウオークが計画されているが、今度こそ大河ドラマ「伊能忠敬」を実現したいものである。お正月時代劇から「大河ドラマ」に出世したドラマも多いと聞いている。

俳優座の「子午線の夢」は、映画はもう実現しないと思っていたところ、二〇〇〇年最後の伊能ウオーク実行委員会で、いきなり脚本が提出されてビックリした。

この映画は、散々だったが、忠敬物を「大岡越前」や「水戸黄門」と同じ発想でドラマ化しても、私は成功しないと思っている。忠敬ファンはもつと真面目なのである。教養的要素をふやし、事実を説明するために、ドラマをセットすればいいのではないか。

配役は有名な役者を並べなくてもいいと思う。有名な役者を使うなら、解説にまわってもらえば人気が出るだろう。

二〇〇一年元日、伊能ウオーク帰着 竹芝桟橋より日比谷公会堂へ出迎え隊を含め、約四〇〇〇人が歩く。

「二〇〇一年第二五号伊能ウオーク特集」に前後の状況は詳しい。巻頭に「伊能ウオーク完歩によせて」と題し、佐原市長鈴木全一氏より寄稿をいただいた。

研究会からは、会員約四〇人に御参加いただく。佐原市、横芝、九十九里町にも話しかけ、研究会・地元関係でバス四台分の歓迎チームを真っ先に作る事ができた。

アメリカ大図発見 二〇〇一年三月、偶々アメリカ議会図書館において、渡辺夫妻が伊能大図写し二〇七枚を発見。学術調査の後、七月初旬に新聞発表。(二〇〇一年第二六号)

富岡八幡に忠敬銅像を建立 伊能ウオークの終了を記念して、伊能測量出発地の富岡八幡宮 大鳥居脇に「伊能忠敬出立の姿」をイメージした忠敬銅像が建立された。(二〇〇一年第二七号)

二〇〇一年三月に建立実行委員会を開いて募金をきめたが、建立、そして除幕式がおこなわれたのは一〇月二〇日だった。物凄く速かった。関係者による募金とはいいいながら、この成績は、忠敬への熱い思いが盛り上がったものだろう。

一般からも合計五〇万円を超える応募があり、また、富岡八幡宮、読売新聞社からも大口の御寄付をいただいた。

アメリカ大図の欠本二枚を、歴史民俗博物館で発見 (二〇〇二年第二八号) 国土地理院の根本氏(当時)の着想だった。秋岡資料で以前から知られていた図だが、アメリカ大図と結びつかなかった。いわれてすぐ、ビンときたが、予想どおり問題なくアメリカ大図の片割れだった。アメリカ図の伝来に関連する重要な史料である。

官板実測日本地図論考の連載 二〇〇二年第二九号で会員・高木氏の三回にわたる力作「官板実測日本地図論考」が終わった。官板実測日本地図について、これほどまとまった論考を知らない。

加賀藩天文学者・西村太沖の報告が終った (二〇〇二年三〇号) 河崎倫代氏の労作である。また、渡辺の学友・谷村聖二郎氏のフィールドワーク、旧海兵の伊能小図探索レポートも掲載。滅失を確認する

のは、まことに残念だが、事実を明白にするのも研究のうちだろう。

朝日OBの岩城さんが、ハルピンで日本語のボランティア教授をされている。(二〇〇三年三二号)伊能ウオークでお世話になった方であるが、怪妙なタッチのエッセイを連載された。また、歴史民俗博物館の柏木家文書を調査したが、内容は柏木家のものではなく、伊能忠敬文書だった。何らかの理由で柏木家に渡ったのだろう。

お栄さんの正式な名前は太崎栄である。二〇〇三年三三三号に、小島一仁氏が、謎の才女お栄さんのことを紹介してくれた。先人の研究紹介だが、我々には情報がなかったから、研究会関連では初出である。

東京国立博物館で伊能小図お披露目(二〇〇四年第三五号) 二〇〇三年一〇月三十一日から二月一四日まで、東京国立博物館で、館蔵

の伊能図と伊能関連史料のみによる伊能展が開かれた。目的は約一年前に発見された、旧昌平坂学問所蔵の伊能小図修復完了のお披露目である。

新聞社とは組まない自主展なので、宣伝のためアメリカ大図の参加を求められ、東京から大阪までの大図原寸複製六〇枚余に、伊能洋さん等による緊急作業で着色し出展された。アメリカ大図フロア展のはしりである。

宣伝力の弱い自主展なので、博物館では一〇万人目標といていたが、結果は一三万人余の入場者があった。

アメリカ大図展いよいよ開幕(二〇〇四年第三六号) 難航したアメリカ大図借用の条件交渉が決着し、日本写真印刷(株)さんの協力で、フランス中図の修復も完了した。博物館展四箇所、フロア展一六箇所の開催がきまった。博物館展の入場者は一三万人。フロア展の入場者も一三万人だった。

アメリカ大図欠本四枚を海洋情報部で発見(二〇〇四年第三七号)

アメリカ大図の欠本が何処かにないか。念のため海上保安庁の海洋情報部を調べたところ四枚とも発見。大騒ぎになった。

釧路では、幕府上呈以来始めての、全伊能大図を展開したフロア展が開かれ盛り上がった。釧路市の人口の割以上が入場した。大異変だった。この際にと、伊能測量最北端のニシベツに記念柱を建立。

伊能忠敬研究会一〇周年記念号(二〇〇五年第三九号) 朝日新聞社元社長の中江さんに巻頭の御挨拶をいただき、研究会の発足以来一〇年間の足跡を振り返った。伊能忠敬さんは強運の人だったが、研究会も時流に恵まれて順調に発展したことに御礼を申し上げたい。

日大文学部で大図展、墓碑銘の読み下し文(二〇〇五年第四〇号) 日大文学部でフロア展と貴重品展が開催された。会場を借りて総会と一〇周年記念パーティを開く。伊能家にあつた墓碑拓本の写真を掲載。現物は風化が進んでいるので、貴重な史料である。

引き続き武蔵大学でも伊能大図展(二〇〇五年第四一號) 地図展と別室の貴重品展示がおこなわれる。ここに四〇号で発表された伊能忠敬墓碑の再現品が展示されていたのには驚いた。

ユニークであり、かつ実際の墓碑は、判読不能となっているので、アイデアに感心した。

伊能大図総覧刊行決定と世田谷伊能家文書の寄贈(二〇〇六年第四四号) 日本ウオーキング協会の会議室をお借りして、研究会として記者発表をおこなう。伊能大図総覧サンプル、世田谷伊能家史料現物の一部も展示した。

世田谷伊能家文書目録を市長に贈呈し、佐原市長から、伊能・安藤・渡辺へ感謝状が渡された。この目録は安藤由紀子、伊能陽子組のライフワークで、一〇年以上かかって厳密な考証にもとづいて、執筆された解説つき目録である。後世に伝えるべき史料と思う。

世田谷伊能家伝存「伊能忠敬関係文書目録」刊行（二〇〇六年第四五号）安藤由紀子・伊能陽子制作の、世田谷伊能家伝存「伊能忠敬関係文書目録」最終版が完成し発行された。また長崎に研修旅行。地元伊能大図原寸複製を謹呈。

「伊能大図総覧」完売、佐渡で伊能大図写本を発見（二〇〇七年第四七号）二〇〇六年一月に発売した「伊能大図総覧」三百部は、一月一〇日完売となった。重さ二〇キロ、定価三九・九万円の本が、発売と同時に完売などとは、全く想定外の話、あらためて忠敬人気を実感する。

佐渡に文化元年の佐渡大図写があることがわかった。記念館には副本があるが、文化元年の大図写しの存在など、聞いたこともない話である。佐渡で作られたから、奉行所には写しがあったことになる。

海上保安庁の伊能図調査報告、伊能家に紺綬褒章（二〇〇七年第四八号）香取市への世田谷伊能家文書の寄贈に対して、伊能家に紺綬褒章が伝達された。また、二〇〇七年一月におこなった海上保安庁海洋情報部蔵伊能大図調査報告（鈴木純子ほか）を四八・四九号に掲載。

鈴木事務局長、前田編集長体制へ（二〇〇七年第四九号）久しぶりの富岡八幡宮の総会で、これまで頑張ってきた福田事務局長が退任された。ご苦労さまでした。

今後は、鈴木事務局長、前田編集長の体制で進むこととなった。当面、最大のテーマは、大図総覧に海洋情報部大図も加えた「完全復元伊能大・中・小図フロア展」と「大河ドラマ」の実現である。関係者のご努力を期待したい。

会報五〇号までの総合所感 まさかこれほど続くとは思っていなかった会報であるが、執筆にあたり、かわった主要イベントを思い出しながら、全会報を概観した。

内容的には、後世に伝えるべき力作が多数含まれており、今後の事業展開のなかで、何らかの形でもつと広い世の中に、発信すべきであると痛感する。元氣がある限り努力したいと思う。

ここまで来られたのは、多数の熱心な会員に支えられたからであるが、特に多くの発表をされている小島一仁、佐久間達夫、安藤由紀子、伊藤栄子、伊能陽子各氏の功績は大きい。

編集していると、どうしても手元に原稿の手持ちが欲しいのである。テーマを探して書いてくれる執筆者は、とにかくありがたい。

また、制作面では、二四号までの三二頁時代は、伊能、安藤両氏が編集の中心だった。二五号からは六四頁に移行し、版下をみずから作るようになって、福田氏が作業の中心となった。

版下から印刷屋さんをお願いしていると、どうしても高くつく。三二頁でも会費の大部分が、印刷屋にいつてしまう始末だった。

「ワードで編集できるよ。自分でやってごらん」といわれ、印刷屋を変えて自分で版下を作ったら、六四頁が三二頁の半分の予算で出来るようになった。構造改革である。

しかしながら、版下づくりの作業は大変である。写真など、なかなか上手くあがらない。写真、カットの配置も難しい。私は二・三号手伝ったかな、そんな記憶である。あとは福田氏の出番だった。

今日のような立派な会報に仕上がったのは、とにかく福田氏の努力によるところが大きい。

さて切りのよい五〇号である。政治改革ではないけれど、ここらで再度面目を一新する会報改革は出来ないだろうか。カラーの追加、体裁、デザイン、写真の改善、市販化等々の中から。外野からは、色々注文できるが、印刷屋と企画を練ってみてはいかが。

（わたなべ いちろう 前代表理事）

『伊能忠敬研究』五〇号を迎えて

伊能忠敬研究会代表理事 星 埜 由 尚

早いもので「伊能忠敬研究」が五〇号を迎えることになりました。「伊能図探求」から「伊能忠敬研究」へと十年を超える歴史を刻んできたわけです。伊能忠敬研究会には、伊能忠敬先生に関する様々な側面に関心を持つ方が集まっておられます。ある方は、伊能忠敬先生の人生に、ある方は伊能図に、ある方は伊能忠敬先生の天文観測にと言う風に、多彩な方々が多彩な関心で伊能忠敬先生を丸ごと研究されていることに伊能忠敬研究会の存在意義があると思います。「伊能忠敬研究」もこのような会の特徴を十分に生かし、毎号毎号様々な側面から、多彩な記事があふれています。

この十年余りの間に伊能忠敬先生を巡って、様々な出来事がありました。特に、各種の伊能図の発見、再評価、伊能測量開始二〇〇年を記念する日本一周ウォーキング、各地での展覧会開催、演劇や映画など様々なイベント、伊能家文書の伊能忠敬記念館への寄贈と目録の作成、「伊能大図総覧」の出版など多岐にわたる事業が行われ、それぞれ盛んに報道され、伊能忠敬ブームを盛り上げてきました。今や国民的存在である伊能忠敬先生は、地下で大いに満足されていることでしょう。今後ますますいろいろな形で伊能忠敬先生の顕彰に励むことが我々後世のものに課せられた責務ではないかと思えます。そのために、「伊能忠敬研究」のますますの充実を期待するものです。

これまで「伊能忠敬研究」の編集に携わっていただいた方々、特に

四九号まで編集長として「伊能忠敬研究」の充実に力を注いでこられた福田弘行さんに感謝申し上げます。また、五〇号を機に新たに編集長となられた前田幸子さんには引き続き「伊能忠敬研究」の円滑な発行をお願いするとともに、会員の皆さんの積極的な寄稿などご協力をお願いする次第です。

(ほしの よしひさ 元国土地理院院長)



伊能ウォーク 1998年 第17号



江戸東京博物館「伊能忠敬展」

1998年第15号



アメリカ大図発見 2002年第28号



銅像建立 2001年第27号

めまぐるしい十年、いつの間にか五〇号

伊能忠敬研究会理事

伊能 洋

年四回発行の「伊能忠敬研究」誌がいつの間にか五〇号という節目を迎えた。言いだしっべの渡辺一郎さんはもとより、編集委員を中心とした皆さまのご苦勞は一方ならぬものであったが、忠敬さん大好き人間が二百人も集つての会が十年余りも続いているのは不思議な気がする。やはり忠敬先生の並はずれたパワーの余慶であろうか。

私は本の内容には殆ど関わっていなかったが、渡辺さんから表紙のデザインや配色の相談を受けたのが、そもその始まりだった。

ペイレさんのフランス中図の発見に際して陽子が渡辺さんにご連絡したこと、あれよという間にさまざま縁が広がり、佐原でのフランス中図里帰り展、研究会の設立、研究誌の発行、朝日新聞の伊能ウオーク参加、富岡八幡宮の銅像設立、アメリカ大図発見とその国内巡回展等々、ざっと指折ってみてもめまぐるしい十年だったが、研究誌の内容も幅広く充実したものになり、新しい発見なども多々あつて存在理由を示したように思う。

さて、最近数年は福田編集長のキメ細かい運営、編集に負うところが大きかったが、大きなイベントも一段落して、前田新編集長にバトンタッチされた研究誌の編集も、じつくりと腰を据える時期に入つたのではないだろうか。個人的な勞力に甘えることのないように、会員全員のさらなる協力が切望されると思う。

(いのう ひろし 洋画家 伊能家七代目)



伊能忠敬測地遺功表（芝・丸山公園）

伊能陽子さん

創刊のころ

最初のころ、会報は古文書の整理をしていた安藤由紀子さんと私、それに芳賀啓さんと一緒に作っていました。岡部孝子さんも手伝ってくれていましたね。芳賀さんが柏書房の社長さんでしたので、よく柏書房にも行きましたし、板橋にあった文巧社という印刷屋さんへ行って校正をしたりしたことをよく覚えています。渡辺さんが地図のほうを担当で、私たちが文書類の方の担当ということでしたので、地図に負けると大変だということで、競い合いながら張り切ってやっていました。そんな時代もありましたね。その後、ページ数も増え、どんどん原稿も集まってくるし、会員も自分たちでパソコンで編集するようになり、時代の流れを感じます。文巧社も今は消滅してしまいましたが、板橋、駒込のあたりをうろろしたあの頃を懐かしく思い出します。

安藤由紀子さん

渦に巻き込まれて

創刊のころ、伊能陽子さんと会報作りに携わりました。そもそも私と研究会とのかかわりの原点は伊能家文書目録です。仕事をやめ三人の親をつぎつぎ看取ったあと、することもなくぼうつとしていた私に佐原の同級生だった伊能洋君から、家にある文書に目を通してくれなにかと声がかかったのです。それで伊能さんところに文書の整理に行っていたら『伊能図探求』というのを出している人がいるというので渡辺さんに連絡をとり、以来、伊能研究会の渦に巻き込まれてしまいました。もともと目録作りは陽子さんと気が合いすぎておしゃべりばかりでちつとも進まなかったのが、渦に巻き込まれてからますます進まなくなりました。目録は二〇年がかりで昨年やっと出来上がりましたが、つくづく思うのは研究会のおかげで人の広がりもできたし自分の勉強もでき、伊能君との約束も果たせたということです。私は

目録を出すのが目的でしたので有難いことでした。人生の空白を有意義に埋めてもらい、輝きをも与えてもらった。本当に感謝しています。

福田弘行さん

通過点でしょうか

毎号、毎号、悩みながらやってきましたよ。どういふところで苦労したかというと、うーん！一号一号にそれぞれの思い出がありますが。内容は違いますが良いことも悪いことも一番は私のパソコンが壊れ急遽入院の事態が発生。このためすべてのデータが消失。再度入力をし直しになり、発行が遅れたことがありました。がつくり！立ち直り以後は紙で原稿記録を残すように心がけるようになりました。

五十号はひとつの節目でしょうが四十九号まで携わっていますと、特に感慨というのを感じられませぬ。通過点でしょうか。時を経ればまた新しい感興もありましょうが。

常に考えていたのはこの会報の性格をどう捉えていくのかということでした。会員みんなのものですが、同好会的な発表の場と新聞や雑誌のように編者サイドで企画ものなのか。双方の話題のバランスがあった号はラッキーだと思ったことがあります。昨今では会員の皆さんに誌上に登場してもらうことを呼びかけました。忠敬さんに関する多様な関心を文章にするにはそれなりのご苦労を原稿の行間には潜んでいました。光る感度の原稿には新鮮な感動を感じながら版下づくりをしたのですよ。ずっとやってきてつくづく思うのはご寄稿を頂いた皆様には有難かったということですね。お話ししてきちんと書いてくださった。本当に感謝しています。

昨今、話題により増ページが続きました。多くの皆さんが参加できる会報が続いていければ、と思っています。

佐渡研修旅行遊学の記

山本公之

模様替え工事中の東京駅地下「銀の鈴」に、佐渡研修参加者二十七名のおよそ三分の二の十六名の会員が集まった。伊能 洋、伊能陽子、星埜由尚、鈴木純子、前田幸子、柏木隆雄、福田弘行、井上靖子、浅井京子、今村恵二、大沼 晃、中川幸子、藤岡健夫、山本公之、丹羽菊乃、江口俊子の方々です。《佐渡への誘い》は、いよいよスタート。金山・おけさ・配所・今はトキで知られる日本海で大きな存在感を抱き持つ佐渡。伊能忠敬測量の足跡を辿って「いざ参らん」。新潟までノン・ストップ・時間三十七分の上越新幹線Maxとき313号、午前九時十二分発車。

新潟駅東口から佐渡行きジェットフォイルに乗るべく渡辺一郎、平岡佳子、高木崇世、矢能 彰、坂本 颯、坂本道子、地元新潟支部小林一三、山岸俊男、石川 進、垣見壮一、山浦佐智代の方々と合流し、全員集合。ホテル日航新潟の入っている朱鷺(とき)メッセ3Fレストランセリーナでランチバイキングを済ませ、展望室から信濃川を見下ろす眺めなど楽しみ、佐渡汽船ターミナルへ駅から乗って来たバスで乗り継ぐ。新潟～両津航路67・2キロ、六十分の佐渡ヶ島へ午後一時キック・スタートした。

旅行は晴れるとなれば、日頃の心がけが良いというおまけがつく。『今日は申し分なし』。三十分前に出航した大型旅客カーフェリーを左手に追い抜いて午後二時の両津港着である。島の中央を貫く国道350号線で佐渡市役所のある金井地区を通過し、運転手さんとバスガ

イドさんの調子の良い「おけさ」を堪能して佐和田から沢根に入る。今日の最初の遊学先、廻船問屋「浜田屋」の子孫であられる笹井様がお待ちになって居られた。早速ご同乗いただき、新潟県立相川高等学校に向かう。高台の校舎まで路肩が狭く急勾配なのでバスを一旦降りて、待機していたジャンボタクシーで何回か往復した。

元禄四年写・佐渡国絵図が所蔵される部屋に通され、カーテンが掛けられ普段はひっそりと納まっているのだろう。地方(じかた)御役所絵図師の石井夏海・文海父子が佐渡国絵図(切絵図となつた6巻)を一枚に仕立てたものとみられ、一国天領の国絵図として存在する。図面北西部分に「元禄之度御上ヶ絵図写」と書き付けがあるようです。

笹井様は、平たい紙箱の中の包み紙を開いて、忠敬が第四次測量で佐渡入りし、一八〇三(享和三)年八月二十九日に宿泊した際の宿帳並びに天体観測書を机の上に広げた。発見された平成十四年四月二十三日(火)の新潟日報社会面の見出しは「一夜の親交・200年経て発見」とある。当時、浜田屋を取り仕切っていた笹井秀山は知識欲旺盛で、忠敬と話が合った結果ではないかと推測されている。絵図についてのは解説は鈴木純子氏・「浜田屋」関係については渡辺一郎氏から



相川高校校長室にて鈴木純子氏の解説により佐渡国絵図をみる



「浜田屋」子孫・笹井様と
(会報29号の5頁に関連記事)

感想が語られた。相川高校宿直のお方ならびに笹井様にお礼を申し上げ、一路、復元された奉行所を素通り金山入りとなる。黄金の花が咲くわけではないが、四方山話に金山は欠かせない。佐渡金山奉行印のある通行手形を手にし四〇〇年の歴史を探索した。金の延べ棒を箱の穴から手で取り出す執念にも似た貴重な体験はいかがでしたか。

ホテルひらねには夕方五時頃到着となり、(株)ゴールデン佐渡所蔵の絵地図類が中広間で待っていた。以下は石井夏海・文海資料抜粋

◎断裂世界図 彩色 33・4×99・9 cm

◎地球万国全国 常陽水府赤水長玄珠翁著 安瀾堂縮写

(原図)寛政初年公布、天保壬寅耳順翁識語 長玄珠の述付き
彩色 40・8×161・1 cm 表・裏表紙あり

◎地球輿地全図(版) 文化庚午春

詠帰斎主人校修 温基軒蔵版 江都彫工江川八左衛門

袋共 彩色 143・5×140・9 cm 表・裏表紙付き

◎蝦夷国全図 文化六年臘月念三日写 最上徳内・近藤守重訳演

「松前蝦夷左之図」伝来・写の経緯を書いた小紙同封

彩色 方位あり 39・0×11・3 cm

◎三国通覽輿地路程全国(写)(原図天明五年秋) 文化五年五月写

夏海蔵写・仙台林子平図 彩色 27・5×39・3 cm

大袋「異国地図類」小袋「三国通覽輿地路程全国一枚」

◎倭漢絵図 余白に外国より長崎までの路程が書いてある

彩色 53・5×49・4 cm 表・裏表紙付き

◎松前毛人地真絵 文斉老人高津甚四郎曲肱 明治七年春三月

(裏書)最上徳内原図柴田収蔵縮写、自己の身分を加筆

彩色 34・5×70・8 cm 表・裏表紙付き

◎無人島大小八十余山之図 (本名小笠原島との副題あり)

仙台 林子平 彩色 方位あり 27・6×82・6 cm
表・裏表紙付(青地・ロシア文字)。

◎陸奥磐城疆界路程全図 文政戊子 (朱印) 静岡堂

彩色 58・3×93・5 cm 表・裏表紙付、袋共。

◎琉球三省并三十六島之図 仙台 林子平図

彩色 52・6×76・4 cm 表・裏表紙付、袋共。

◎佐渡国三寸六分一之図(伊能図か) 朱印「安瀾堂蔵書印」

彩色 111・2×166・4 cm 方位・経緯線あり、

表・裏表紙付、「佐渡之古図」と墨書の袋付

※ 安瀾堂とあるは、石井夏海 詠帰斎は山田聯のこと。

この席上では、渡辺・鈴木両氏に高木崇世氏の三人が蘊蓄を傾けての解釈・ならびに造詣により、これらの資料を食事前の一時間余りの間によく成果を上げることが出来たことは喜ばしい限りである。

特に、地球を4枚の楕円に分割して表した「ゴア」と呼ばれる地球図『断裂世界図』と、日本を含む地球の四分の一を記し、木版を原寸大で綿密に筆で模写した『地球輿地全図(版)』二点は、翌十九日の新潟日報に「お宝発見! 江戸世界図」と題され、佐渡金山運営会社の所蔵品を伊能忠敬研究会が鑑定したという記事になっていた。

遅く始まった宴も二十時に中締めとなって、進行係の新潟支部からのプレゼントをいただき部屋へ戻る。平根崎温泉の湯槽から、向うの夜景が気になったが、湯気の向うはガラス越しに、ほのかに暗い。

此处、旧相川町・尖閣湾の北東の平根崎温泉。ホテルひらねは、海に面した高台。早朝の海は風模様で、崖を背に集落が陽を浴びる。さて、二日目はホテルひらねを八時に出て相川を通過し、中山トンネル・沢根を抜け真野湾に沿って、今日の遊学地・真野新町を目指す。山本家は旧家の良き時代の古書・骨董、生活用具小品が収集されていることは、初めてのものでも唯々納得するばかり。訪問客も格式の

ある方々のお立寄りの名札など、また往時を偲ばせるお籠が天井近く
に吊られてある。門から小径に句碑など数点。しばし家のなかの説明
が終えると、一間に導き巻き物の端を抑え、表装されている忠敬・麻
田剛立・間確斎の三通を御披露された。高橋尊君 尊下 伊能勘解由
高橋作左衛門様 奏復 麻田剛立、渋川大先生閣下 間確斎と、各々
夫々、宛先署名ある書状で如何にして入手せしかは、特定が難しいと
のこと。同家では六世子温（一七五四年〜一八三七年）の代から家蔵
資料の収集が始まったとあれば、宝暦三年生まれで天保八年、八三才
で亡くなられている方がおよそ五〇才の頃が享和・文化年代となる。
こんな要らぬ憶測はさておき、代々幅広いこれらの文化財を受け継が
て今日にいたっている。二五、六人の訪問者に終始笑顔で応対なされ、
有り難い束の間の時間でした。アルコール共和国尾畑酒造は、道路を
へだてて斜向かい、酒蔵見学とお酒など買物をしてバスに乗り込む。

向かった小木は、近世後期の航路図によれば、今の両津が佐渡と書
き込まれ、もうひとつがこの小木で、繁栄を謳歌したのは文化文政期
西廻り航路の寄港地。江戸時代奥羽・北陸の諸港から日本海・下関海
峡・瀬戸内海を廻って大阪にいたる航路で佐渡では此処だけだった。
小木の寺泊間を、風の状態では2〜5時間位掛ったという実在する小
廻船が別棟にあった。平成十四年に竣工の小木半島景勝地にエクスト
ラドースト橋「長者ヶ橋」294メートルは佐渡ヶ島で海上に架かる
のはここだけ、立派な近代的な姿を見せる。パンジー・ジャンプも楽
しめるとか。だが、この橋の道路には表面がぼろぼろ剥落している
が地図らしい。『新訂坤輿略全図』のレプリカ。もう一つは『プリエ
の日本図』（神戸市立博物館）だった。風化すれば意味が無い。いず
れも、佐渡が生んだ地理学者柴田収蔵の模写。『新訂坤輿略全図』に
は「相川」と「シユク子ギ」と記載されているのは、郷土を著わさん

とつとめたる心を使うべしと題言にあるそうである。橋上展望スベ
ーを上手く利用して、バスガイドさんと一緒に皆でカメラに収まる。
これから行く宿根木はどんな所だろう。

重要伝統的建造物群保存地区は、関東ではたった二件、埼玉県川越
市川越（平成十一年十二月）そして千葉県、どこでしょう、決まっ
ていますね。香取市佐原（平成八年十二月）です。宿根木は（平成三年
四月）と先輩格である。意外なことで、『忠敬と縁』と相成った。

柴田収蔵の墓参りにこんなに行列が出来たのは、県外から来た団体
として我々ぐらいでは無かるうか。一村全戸が称光寺檀家で、世捨小
路というところに生家がある。公開民家・三角家など船大工ならではの
技が凝縮している建造物、人がひとり通れるかどうかの生活道路が
狭い地域に集落を形成している。千石船と船大工の里 外壁も船板の
の余ったものを使っている。香華の絶えたことがないという評判どお
りで、帰りしなに、小雨が故人を偲んでか、見送り雨になった。

順徳天皇（鎌倉時代）・日蓮上人（鎌倉時代）・世阿弥（室町時代）
安寿と厨子王・鶴の恩返し・おけさの伝説など 動く・語る・舞うの
佐渡歴史伝説館で、お昼食・見学を済ませた。ところで、忠敬先生は
佐渡を享和三年（一八〇三）十月十一日〜三十一日（新暦）に測量を
し、当時の集落名は継承されているとのこと。海岸や街道筋とは、別
に一カ所だけ寄り道しているのが、順徳上皇の墓所である。（中略）
図中の小さな赤い星印は天測点であり、島内に一〇カ所ほどあるが、
西の相川から東の夷町（両津）までの北半分には全く印されていない。

（以下省略）天候が悪く観測出来なかったのか、手分け測量のため、
このルートは忠敬自身歩かなかった。・星印を書き忘れたか、また私
の眼の錯覚か？と、研修資料5の巻頭ふるさとは遠きにありても見え

るの木下章氏の指摘である。「もしこれだけの距離の区間で天測していなければ、この部分の精度は他より少し劣る可能性がある。いつか調べてみようとおもう。」と結んでいる。昨晚、私が夜空を見ようとして果たさなかったのは、なんだか後になってみると、遊学の心がもつと真剣にあったら、外気に触れていただろう。

百敷や古き軒端のしのぶにもなおあまりある昔なりけり 順徳帝
小倉百人一首一〇〇番目の歌であることも知らず、崩御された仁和三年（一二四二）九月十二日は、現在の太陽暦では十月十四日 御年四十五歳。これは知ったのは帰京してから、山本家で領けていただいた佐渡郷土文化一〇一号でした。両津へのバス発車までの間、歩いて行こうかと迷っていた自分を意識する。他ならぬ真野御陵でした。先人は時間を割いて立ち寄っているではないか。

相川でバスを降りた高木崇世氏は、今頃どうして居られるかなど思いながら両津港で出航を待つ。二〇〇四年（平成十六年）十月の新潟中越地震、今年三月の能登半島地震、そして七月の新潟県中越沖地震と日本海側で大地震が続いた。もしも、芭蕉がこの地で大地震に出会ったら、あらうみや佐渡に横たふ大なまず としたかな。鹿島・香取と言わず石川県羽咋市（はくいし）大穴持像石神社にも地震おさえの石と呼ぶ要石があるそうだ。昨夜何気なく食膳に添えられていた「元氣出していこー！新潟・歓迎・伊能忠敬研究会様」とメッセージされた贈り物。さをり織りとやら新潟名物「笹団子」のストラップ、新潟県中越沖地震で被害にあった小規模作業所で、願いを込めて作られたものを記念にいただきました。両津十五時三十分発ジェットフォイル搭乗券を渡された。佐渡とお別れである。

新潟から弥彦温泉に泊り、翌十六日は弥彦神社から良寛の里美術館

・出雲崎天領の里に廻り、帰路に向かう。バスの中での北原白秋作詞 中山晋平作曲の「砂山」の合唱で締め括られた。

海は荒海

向うは佐渡よ

すずめ啼け啼け

もう日はくれた

みんな呼べ呼べ

お星さま出たぞ

佐渡研修資料

1 伊能忠敬研究会『佐渡研修旅行』旅のしおり

2 「佐渡国天領の国絵図」

国絵図の世界・国絵図研究会編、柏書房

3 「佐渡国三寸六分一里之図」1株ゴールデン佐渡所蔵1

鈴木純子

資料①相川町誌（岩木 擴編 昭和二年）

②御国絵図御改正御用中日記

4 良寛と忠敬「忠敬は、良寛の実家に二泊……」安藤由紀子
5 月刊 地図中心 2006年6月

特集 The 佐渡1島1市 財団法人日本地図センター

（やまもと きみゆき 小平・算数を楽しむ会）



宿根木・称光寺の柴田収蔵墓所

佐渡旅行に参加して

中川 幸子

佐渡へ

新潟支部の石川さん、垣見さん、小林さん、山岸さん、山浦さんと越後交通の西沢さんのにこやかなお出迎えに恐縮しながらも会話が弾む。ホテル日航新潟セリーナでの昼食を終えて登った展望台から眺める佐渡は大きく、美しく見えた。新潟港からジェットホイルに乗船すれば六十分程で佐渡の両津港に着くという。その佐渡測量の為に忠敬さんが乗った船の乗り心地はどのようなものであったのか。私たちの船は軽やかに、揺れもなく滑るように走った。

相川高校

バスのガイドさん、ドライバーさんによる「佐渡おけさ」の御披露を耳にしなが、その昔忠敬さんが宿泊されたという回船問屋を窓からちらりと拝見した。途中、資料を持参して乗車された笹井様と共に丘の上の相川高校に到着。お目当ての地図は、歴代の校長先生方のまなざしに見守られながら壁に飾られてあった。そこで笹井様持参の史料を拝見する。壁の国絵図は美しい。メンバーの中から「壁に貴重な絵図を飾るのは傷むのもったいない」と言う声もあった。確かに貴重な史料ではあるが、保存に注意しながらも未来の文化をなう生徒達に郷土の学者の偉大な業績を示して、よき人材を育てて欲しいものだと思う。

佐渡金山

バスは金山のシンボル「道遊の割戸」を過ぎて宗太夫坑に到着。坑内は薄暗く坑道の両側に狸穴と呼ばれる小さな坑道が無数にある中を人形達が当時の金採掘の有様を見せてくれる。精巧な人形の動きに、こちらの目が合ってハッとしたり、江戸から送られた囚人の水替人足達の悲劇を思いやったりで、明るい地上に出たときはほっとした気分であった。

けれども金山はとかく囚人達の悲しい面ばかりが語られる事が多いのではないだろうか？佐渡は金採掘で各地から人が集まり、経済的には豊で文化も発達していたし、町は賑わっていたはずではあるが……。



「道遊の割戸」江戸期の露天掘の跡

平根崎温泉「ホテルひらね」

夕日の眺めが美しい外海府に面して建っているホテルに到着し、各自荷物を部屋に置くと直ちに集合して研究開始である。広間には古地図や文書、珍しい世界地図の写しが展示されてあった。

又、このホテルの廊下やロビーの壁に古絵図、金山関係の文書、佐渡の地理学者柴田収蔵、石井夏海についての解説等が飾られてあった。貴重なコレクションをさりげなく見せてくださっている心意気が嬉しい。

懇親会の席は籤引で決まり、通常は疎遠なメンバーとも、差しつ差

されつ和気あいあいのうちに新潟支部の方々のお世話で福引が始まり、心尽くしの賞品の数々に大笑いで宴は一段と盛りあがった。

山本家

昨夜の温泉の効果は抜群で皆つやつやとした顔色で元本陣山本家を訪問した。土間の天井に駕籠がつるしてあるのを眺めていると「我が家の昔の自家用車ですよ」とのご主人の声には歴史の重みを感じられる。昔をしのばせる室内に貴重な史料を並べて見せていただいた。その中に忠敬さんの書状が一通あり、御主人の「撮影しても良いですよ」の言葉に大感激で撮らせていただいた。佐渡で忠敬さんの直筆に目にかかるとは思いもよらぬ幸運であった。その他史料の数々を拝見するのに時がたつのも忘れ、予定時間をオーバーしてしまったのである。

長者が橋

アルコー共和国「尾畑酒造」で試飲とお土産ショッピングを楽しみ、小木にある海運資料館で北前船についてと、現存している和船「幸丸」を見学したあと、山中を走っていると瀟洒な橋が見えてきた。鄙



「長者が橋」で柴田収蔵作・世界地図のレプリカを見る。

「シュク子ギ」の地名も。

びた風景の中にモダンな姿の長者が橋である。橋の道路二ヶ所に柴田収蔵の地図のレプリカが埋め込まれている。この美しい橋は誰もが歩いて渡り、地図に目を止めてほしいと願う。

宿根木

江戸期の町並みを保存している町である。細く狭い路地の左右に並ぶ家々は趣がふかい。柴田収蔵の生家の前を通り、称光寺の墓所を詣でる。次は自由見学というときに突如激しい雨に見舞われた。用意の良いメンバーだけが公開されている民家を見学し、その他は土産物屋の店先で雨宿りの時を過ごすことになった。

佐渡歴史伝説館

順徳天皇第一皇女慶子女王が語る順徳帝の物語から始まって日蓮、世阿弥等流人の物語と語り部の爺さん婆さんの佐渡の昔話を精巧に作られた人形が語る。本当に人形が話をしているような表情筋の動きである。

昼食後、お土産コーナーを物色していたら北朝鮮拉致事件のジェンキンスさんが煎餅売場に笑顔で立っていた。煎餅売り上げのほんの数パーセントが拉致問題支援の資金になるという話である。

弥彦温泉へ

再び戻った小木・両津には雨の降った跡がない。宿根木での雨との遭遇は何だったのだろうか。ジェットホイルに乗船、着いた新潟で本日で帰宅する人と別れ、十六名が弥彦温泉「みのや」へ向かった。そこで新潟支部山浦さんのお嬢さん西沢さんが参加、私達女性の平均年齢を下げてくださった。「みのや」は大正浪漫の趣のある豪華な飾り付

けの館での宿泊である。なんとも豊かな気分で見りについた。

弥彦神社・パノラマタワー

朝、ボランティアガイドの案内で弥彦神社を参拝する。越後一ノ宮の格式ある神社で国宝の建物も存在する。ガイドさんから手の清め方、他とは異なる拝み方を習う。二礼四拍一礼だそうで拍手が倍である。全員元氣よく四回手をたたいて参拝し、清々しい気分だ。

バスで弥彦山山頂に登り、パノラマタワーに乗った。これはゆつくりと回転しながら新潟の景色を三百六十度眺めることができる。眺望は素晴らしく、昨日過ごした佐渡がやや、霞んで見えた。

良寛の里美術館

長岡の良寛の里美術館では面長なお顔の良寛さんの像が入口で迎えて下さる。出雲崎にも良寛美術館があるが、長岡は貞心尼との出会いの地ということで、良寛さんと貞心尼の書や詩歌を中心に展示してあり、ガイドさんが晩年の良寛さんと貞心尼の温かい交友関係を語っていた。

寺泊

有名な魚市場と聞いていた。確かに新鮮な魚類がかなり安価で売られている。日本海の海の幸が豊富な市場は人々で賑わっていたが、年末は身動きできない程の混雑だそう。魚店の一つ、角上魚類さんの二階でいただいた昼食は新鮮な魚が大量で美味でも食べ切れなかった。

出雲崎天領の里

「時代館」のロビーで又、良寛さんの像にお目にかかる。ここは良

寛さんの生誕地であり、忠敬さんも宿泊している。二人は顔を合わせた事があったのだろうか？安藤さんのご研究が頭をかすめる。壁に飾られた年表を見ていくうちに「一八〇二 享和二 伊能忠敬海岸測量に来町する」という記事を見つけた。忠敬さんは良寛さんの実家橋屋に宿泊して居り、名主であった良寛さんの弟由之と当然話をしている。良寛さんは気ままな身であったから会えたかどうかはわからないが、由之との話の中に兄良寛の事がでた可能性もある、しかし忠敬さんにとって良寛さんは当時田舎の名もない一僧侶であり、日記に書くほどの事もなかったのかも知れないと思う。

時代館の中は代官所と宿場町が再現されていて江戸時代に迷い込んでしまった気分になる。北前船の寄港であり、佐渡の金銀が運ばれる重要な港町の華やかな賑わいがしのばれる。続けて「石油記念館」で出雲崎の石油についての歴史を見学した。

夕日の丘公園

にいがた景勝百選一位当選の地である夕日の丘公園に向かう途中で小雨が降り出してきた。小高い丘からの眺望が素晴らしいとの事であるが、小雨で煙り佐渡がぼんやり見えるだけで残念であった。

長岡駅で研修旅行は解散。新潟支部の皆様大変お世話になりました。佐渡・弥彦と宿も素敵で楽しい思い出ができました。有りがとうございました。又越後交通の西沢さんが懸命にサービスして下さる姿はほほえましく、なかなか良い会社の方針だと思っていれば、山浦さんの義理の息子さんであったとか……。いろいろと有りがとうございました。

(なががわ さちこ) 世田谷古文書会



佐渡旅行のしおり



今回の旅の見どころのひとつ
山本家。昔のままの屋敷も圧
巻。次の機会にゆっくり再訪
したいところです。



「ホテルひらね」の広間で
ゴールデン佐渡所有の古地図の見学



「佐渡
尖閣湾」
江口俊子さん画



柴田収蔵作世界図のレプリカが描かれている「長者ヶ橋」にて



宿根木の町並



柴田収蔵生家の案内板

2007年度 伊能忠敬研究会研修旅行

石井夏海・文海旧蔵の古地図を管見する

高木 崇世 芝

「ゴールデン佐渡」社長、永松武彦氏の厚意により、多くの古地図を拝見することができた。その中から主だった図について感想を述べてみたい。

世界図は五点、「地球万国全図」は長久保赤水作であるが、日本周辺図は実寸大に、全体図は縮小して写したもの、二枚をつなげた図であった。「断裂世界図」は地球儀用地図で、いわゆるゴアであり、四面に分割された小図であるが、ゴアの現存は日本では、わずかに二点より確認されていない貴重なもの。「五大州之図」は図中に「文化元子九月魯西亜人持来」と記載があり、文化元年レザノフが仙台の漂流民を伴って長崎に來航した折、大槻玄沢等が帰還した漂流民に尋問して書き上げた「環海異聞」(文化四年著)の挿絵である。「地球輿地全図」は、若年寄堀田正敦の家臣、山田聯(綱二郎ともいい、慥齋・詠帰齋と号す)が、日本周辺から太平洋の一部を描写した大図で文化七年に木版(無彩)で刊行されたものの実寸大の写図。木版図かと思われるほどの精写であり、施された色彩も見事である。「伊能佐渡図」につぐ逸品であろう。「倭澳絵図」は、日本全島と朝鮮、そして中国の一部を描いた東アジア図ともいえるべき図であるが、元図がどのようなものか判断できなかった。

次に日本図であるが、「改正日本輿地路程全図」は長久保赤水作の写図。安永八年が初版であるが、この写図は寛政三年版を夏海が文化五年に写したものの、素晴らしい写しで夏海の力量が分かるものであった。

「三国通覽図説」(天明六年刊)付図は本来五枚であるが、日本周辺図・琉球図・無人島図の三枚があり、日本周辺図はなぜか木版図の四分の一に縮小して、文化五年に夏海が写した図であった。

私が期待していた蝦夷図は三点あった。「松前蝦夷地之図」は文化五年前後に作成された図であるが、付箋によつて嘉永三年に写されたと分かる。「蝦夷国全図」「松前毛人地真絵」の二枚は同じ図であるが、文政年間以降、大いに流行した蝦夷図と同系統の図であった。前者には「近藤守重訳演、文化六己巳臘月念三日於擁書樓写、石井夏海蔵」とある。近藤守重とは北方探検家で書物奉行を勤めた近藤重蔵のことであり、「擁書樓」とは考証学者、小山田与清の書齋名である。因みに近藤重蔵の書齋名は「擁書城」といった。後者の図名中の「毛人地」とはアイヌ地、すなわち蝦夷地を指すことばである。

(たかぎ たかよし・北方図研究家)

山田聯「地球輿地全図」の写図を解説する高木崇世氏



佐渡市相川「ホテルひらね」(ゴールデン佐渡経営)にて



お宝発見
江戸世界図

佐護市下相川のゴールデン・佐護の所蔵品に、全国的にも珍しい江戸時代の地図の写しが複製送られていたが、十八日までに分かった。地図研究者らでつくる「伊能忠敬研究会」(東京都)が、このほど同市を訪れ、確認した。



「ゴルデン佐渡が所蔵する『地球輿地全図』を調べる」「伊能忠敬研究会の会員」「佐渡市戸中のホデルひらね

佐渡金山を運営する同社は、江戸時代以降の絵図や建物など千六百点以上を所蔵。このうち、江戸時代後期に活躍した佐渡奉行所の絵師、石井夏海・文海親子の子孫が所蔵していた地図が二十三点あるという。

同会が佐渡を視察に訪れた際に、伊能忠敬が測量した地図の写しも所蔵している同社に立ち寄り、二十、三席のうち十数点を鑑定、地球儀、地球儀、緯四一四三・五五、緯四一八三と、断製世界図、緯三三・四三、緯二二の二点に資料的価値が高いことが認められた。

思われるには、伊能と同席
 として、大正十一年の南洋
 に出かけた。この南洋に出
 かけたのは、伊能が南洋の
 調査に熱心な人であった。

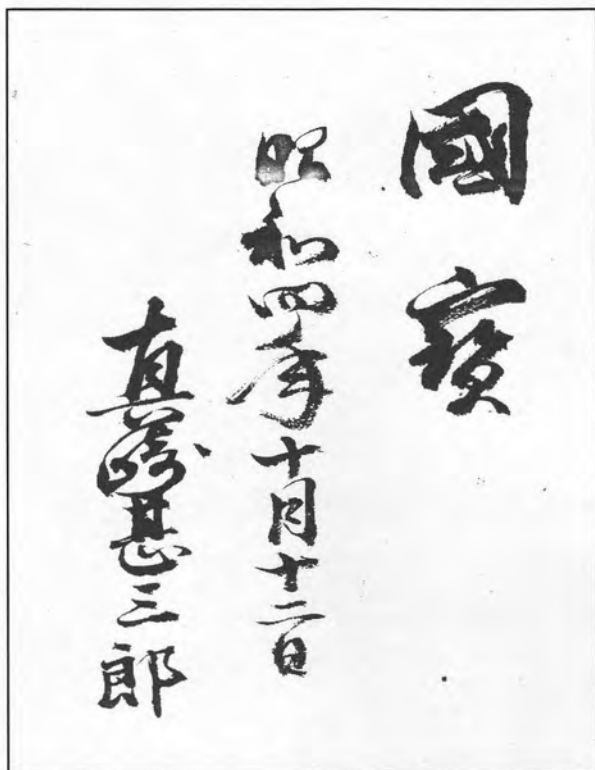
本は本座を原として綿密に筆で模写し、原版にはない彩色を独自に施した。同会によると、本版刷りの図は国内四、五枚だけだが、「ゴッホ描いた写しが奥かたのものは初めてではないか」といふ。『断崖世界図』は、地を四枚の構図に分けた「ゴッホ」を呼ぶ地球図。原本は六八(年)に多くの人間世界でいきな「ヨーロッパ」作られた。同会の渡辺 彰も喜望峯・文庫蔵が他

2007 年 10 月 19 日

芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

伊能陽子



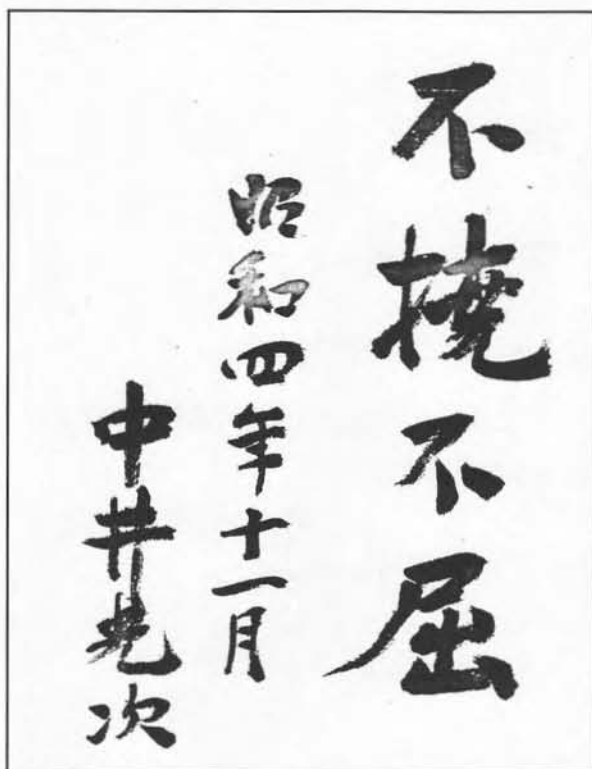
真崎甚三郎

まさき じんざぶろう (一八七六—一九五六)

軍人。陸軍大将。佐賀県生れ。教育総監。

皇道派の中心と目され、二・二六事件関係者として
起訴されたが無罪。
(広辞苑)

※昭和四年(一九二九)と言えば第一師団長、台湾軍
司令官、参謀次長兼軍事参議官を歴任しはじめる超
多忙の時期と思われるのですが。



中井光次

なかい こうじ (一八九二—一九六八)

内務省勤務。第十代大阪市長。第十二代(公選二代目)大阪市長。全国市長会第五代会長。

(フリー百科事典 ウィキペディア)

※昭和四年は内務省勤務時代。

(いのう ようこ 伊能忠敬研究会顧問)

若き研究者紹介

「こんにちは！ 春香です！」

編集部

このほど、伊能忠敬研究会あてに一通の封筒が届きました。中には「伊能忠敬①」と題する分厚い書類が入っていました。表題の下には「2年4組 石谷春香」という署名。一見、夏休みの宿題レポートのような外見でしたが内容を一読して驚きました。当研究会の会員である女子中学生が長い期間をかけてこつこつと独力で調べ上げた、調査研究報告だったのです。それはA4判ヨコ罫紙に手書き原稿で一〇〇〇頁にも達する膨大なもの。しかも随所に地図や写真が織り込まれ、実証的な研究であることを証明しています。「若き研究者あらわる！」このニュースは十月二〇日に開催された佐原での懇親会の席において紹介され、一座の話題をさらいました。五〇号を迎えた記念の号にふさわしい若き研究者のプロフィールを皆様にご紹介したいと思います。

最若手会員はエネルギーシユな研究者

「伊能忠敬①」の著者・石谷春香さんは現在、中学二年生。もちろん伊能忠敬研究会きつての若手会員です。バスケット部に所属し、スポーツにも勉強にも一生懸命な学校生活を送っておられます。写真で見ると石谷さんの姿は可憐そのものですが、自分でテーマを見つけて現地調査にも出向き、どんどん研究を進めていく姿は「たのもし」の一語に尽きます。その笑顔に接する誰もが力をもらって元気になれるような、そんな春香さんから会員の皆様へメッセージをいただきました。

会員のみなさんへのメッセージ

私は一年間かけて伊能忠敬を研究しました。最初はたくさん本を読んだり佐原や九十九里に行きました。それから忠敬を研究するだけでなく、忠敬と同じように測量したり、富岡八幡宮から川崎まで歩いたり、神奈川県海岸へ行ったりしました。忠敬は全国を歩いて測量しましたが、とてもまねはできないと思いました。ところで伊能忠敬は地図が完成する前に亡くなってしまいました。とても残念です。しかし私は地図はまだ完成していないと思



伊能忠敬旧宅前で（写真 石谷春香さん提供）

編集部から

石谷さんの研究報告の内容は次号に掲載します。

伊能忠敬

①

2年4組
石谷春香



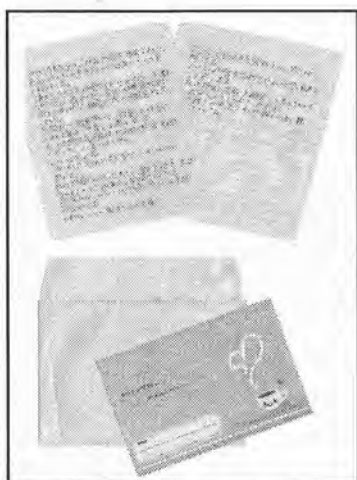
1千頁の労作

います。私は伊能忠敬が歩いた同じ道を行きましたが、昔のままのところはあまりありませんでした。横浜などとみらいや川崎の京浜工業地帯などです。

日本はどんな変化しています。だから地図はまだ完成していないと思います。そしてその地図を完成させるのは今の私たちだと思います。私は伊能忠敬を研究してたくさんの人に出会えてとてもよかったです。また機会があったら何か新しいことに挑戦したいです。

学校初の学校長賞を受賞

この研究によって春香さんは校長先生から「学校長賞」を授与されました。校長先生は「二十六年間も学校にいるけれど、こんなのは見たことがない。大学生にも見せたい」とおっしゃったそうです。ほかの先生も「学校長賞はいままでなかった。すごいことなんだよ」と言ってくれたとか。こつこつと地道に努力して、前人未踏の成果をなしとげる。春香さんにも忠敬先生流のパワーがあふれていますね。



編集部が届いたお手紙と封筒



石谷さんに授与された「学校長賞」。学校始まって以来の快挙

榎本武揚百回忌に参列して

伊藤 栄子

晴天に恵まれた十月二十日(土)、榎本武揚の百回忌が本郷の吉祥寺本堂で営まれた。この記事は、翌日朝日新聞で早速報道された。参会者は約二五〇名で、広い本堂も満席状態で法要が始まった。参列した多彩な人々の顔ぶれから、施主の榎本隆充氏の交友の広さと、未だに人気の衰えない榎本武揚の人柄にふれた一日であった。当研究会ではこの日、佐原の講演会と日が重なり、私共の会から百回忌への参加者が少なく残念であった。ご案内を頂いた伊能陽子さんと私の他、来られた順に、西川治氏、植田浩一氏、首藤郁夫氏らに接して、ほっとする。主な参会者、または団体名

駐日メキシコ大使夫妻

(武揚はロシア全権大使時代から、海外移民事業に強い関心をもっていた。メキシコ政府は明治六年、海外からの移民受け入れを開始した。

コーヒー栽培は成功を見なかったが、彼地には往時の碑文がある。)

日蘭学会からイサベル田中夫人

(オランダは徳川時代から明治の初期まで、どの外国よりも長く日本と関わってきた。この国から武揚を始め留学した日本人は多くの恩恵を受け、人材も育った)

開陽丸子孫の会(幕府がオランダに発注して作った軍艦。武揚らは開陽丸に乗りオランダから帰国した。その子孫の会を立ち上げたのは榎本隆充氏である。)

咸臨丸子孫の会(武揚らがオランダ留学時、江戸から長崎まで乗船)幕末史研究会

東京農業大学(武揚は明治二四年育英農科を設立、後の農大となる)

学習院(施主の元子爵、榎本隆充氏の母校)

新選組流山隊(土方歳三は武揚と共に戦って函館で戦死した。流山は近藤勇が逮捕された場所、新選組の揃いの羽折・袴着用で参加)

東京農大ボーイスカウト(会場のテント等設置に協力)

また北海道から三〇名近くの人々が、羽田からマイクロバスで参加されている。来年は北海道新聞の協賛で、函館を中心にして武揚の百年祭が行われるというから、そうした関係の人々であろうか。以下略

読経、焼香の後、作家童門冬二氏の記念講演へと移る。中央区箱崎出身の氏は、家康入国より私の先祖の方が、前から江戸に住んでいた、とユーモアたっぷりに話を始められた。オランダ留学、ロシアの公使等を経て国際的感覚を身につけた武揚は、しかし決して和の心を失わなかったという、江戸っ子作家童門氏の話は聴く人を魅了して講演は終了した。



武揚の墓がある東京・駒込の吉祥寺



「海軍中將子爵榎本武揚墓」
隣はたづ夫人の墓



榎本武揚

(一八三六～一九〇八)

明治四十一年十月二十七日没。今年は没後九十九年に当たり仏式では百回忌。来年は没後百年を迎えることから、北海道をはじめ武揚にゆかりのある各地で記念行事が企画されている。

*武揚の菩提寺は諏訪山吉祥寺(曹洞宗)である。文京区本駒込三ノ十九ノ十七 営団地下鉄 南北線 本駒込下車三分。吉祥寺は江戸四ヶ寺の一つとして名高かった。堂宇は戦後建てたもので、何よりも一万坪という境内の広さは都心では珍しい。並の小学校なら四校位は入りそう。武揚の墓は榎本家の広い囲いの中にあつた。戒名は「聖海院殿維揚梁川大居士」ちなみに、院殿：大居士の号を附けられるのは、戦前は華族以上の人に限られていた。たづ夫人と並んだ武揚の墓所の近くには、順天堂大学と刻まれた塔墓と、その創立者佐藤家の墓地、また武揚の姉らくの墓、赤松家の墓とここには武揚の親戚筋の家の墓が集まっている。境内の中には、二宮尊徳、川上眉山の墓もある。

(いとう えいこ 古文書研究家)



伊能図使ったロードマップ
県立歴史博物館で確認

東海道、色鮮やかに

江戸時代の測量家、伊能忠敬(一七四五～一八一八)が作成した詳細な日本地図「大図」(三万六千分の一)を基に、幕末から明治初期に作られたとみられる東海道の「ロードマップ」が二十六日、県立歴史博物館(横浜市中区)で確認された。伊能忠敬研究会会長代表の渡辺一郎さん(八七)らが鑑定した。

地図は「自神奈川至小田原 東海道」と題され縦約五十センチ、横二枚余の現在の横浜から箱根までの東海道周辺で、大図二枚からはほぼ原寸大で写していた。山並みや小田原城などを色鮮やかに描き、測量経路、天候観測地点も詳細に記されている。

博物館が一九九三年に東京都内の古書店から購入。研究会によると、伊能図から作られた水路図は見つかっていないが、街道図は初めてのこと。

渡辺さんは「すべて焼失した原図の姿を知る大変きれいな図だ。描かれた地域は当時、外交・交通の要衝で、図面に触れることができた立場にあった人が実用目的でつくったとみられる」と話している。

伊能忠敬が作成した地図を基に作られたとみられる東海道のロードマップ。下は箱根付近の山並み、上は現在の横浜付近。二十六日、横浜市中区の県立歴史博物館

伊能図から作られた幕末～明治の東海道ロードマップ (平成19年7月27日 神奈川新聞)

佐原の集いー伊能忠敬記念館 十月二十日（土）

特別展「西日本測量と絵地図」と講演会

齋藤 仁

東京グループは、東京駅八重洲口から高速バス（銚田行）で約一時間半で佐原へ到着する。堀川沿いに秋日和の散策。「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された古い商家の町並は観光の人々が目につく。先週は佐原の大祭秋祭り（十月十二・十三・十四日）、山車の巡行（乱曳き）、囃しと手踊り（サツバ舟）での賑わいをテレビニュースで見た。

記念館で久しぶりに伊能楯雄館長、青木・紺野学芸員にお会いする。今回の「特別展」では、現存する最古の行基図（称名寺蔵・金沢文庫）の一枚は興味あるもの。伊能図作成前後の日本図、間重富の西国筋街道実測図も初めて目にする。その他常設展の内容も充実して良く纏められている。

午後から講演「間重富と伊能忠敬」嘉数次人氏（大阪市立科学館）、間重富の果たした役割を改めて認識する。また当時の暦学の難しさ、高橋至時の若き死（四十一歳）は、彼の勉強ぶりの凄さ、身体に無理を来たした（結核）のか、など、とても興味ある内容でした。

講演後、佐原コミュニケーションセンター前のレストランで親睦会、香取禧良氏が中心となり、佐原の方々と親交を深めた。香取市教育長の関亮氏、講師の嘉数氏も参加戴き、ざっくばらんな話し合いがされた。その折、研究会の最若手の会員である中学生の石谷春香さんの熱心な研究ぶりの一部が紹介され、将来頼もしい明るい話題でした。

これから新事務局長・鈴木純子氏、新編集長・前田幸子氏の編成で



特別展に展示された興味深い品々



嘉数氏の内容充実した講演



間重富は伊能忠敬に暦学を教授した



懇親会で労をねぎらう

出発します。会報も五〇号となり、今までの蓄積を思う会合でした。
（さいとう ひとし 学習院名誉教授）

「地図展 2007 in 富山」へ行ってきました

河崎 倫代

十月二十日（土）、会誌四九号にも案内されていた、「剱岳測量一〇〇年記念「地図展 2007 in 富山」」へ行ってきました。

◎Cゾーン：郷土の測量家「石黒信由」と「伊能忠敬」

「伊能忠敬」と地元出身の測量家「石黒信由」が使用した測量機器や絵図を展示し当時の測量の様子を紹介します。ふたりの出会いを紹介し、郷土の古地図や伊能図を展示します。（HPより）

ということ、伊能大図の能登・越中レブリカの床面展示、測量機器のレブリカや伊能中図・小図掛け軸の展示などをゆつくり鑑賞しました。かなり風雨が強く寒い日でしたが、土曜日の午後ということもあってか、大勢の来場者でにぎわっていました。

（かわさき みちよ 能登さいはて資料館長・石川支部長）

○会期 平成十九年十月十八（木）～二十一日（日）

○会場 富山県民会館

○主催 国土地理院（財）日本地図センター（社）日本測量協会、他

○内容
Aゾーン（地図で見る富山の歴史） B（剱岳測量一〇〇年）
C（郷土の測量家「石黒信由」と「伊能忠敬」） D（大地を測り地図を作る） E（防災コーナー） F（児童生徒地図作品）
G（地図と遊ぶ）

郷土の測量家「石黒信由」と「伊能忠敬」のコーナー



伊能大図（能登・越中）のフロア展示も

伊能家蔵書は五千冊(二)

佐久間 達夫

三「書籍目録」などから推測できる忠敬の佐原時代の学問

宝暦十二年(一七六二)十二月八日に北総の名家伊能三郎右衛門家の一人娘・達の婿養子に入ってから、寛政七年(一七九五)五月に江戸へ出るまでの三十余年の間、忠敬は家業に専念し、まったく学問から離れてしまったのであろうか。

忠敬の前半生の生活の様子を把握する史料としてよく引用される文化十年四月二七日に測量先で認めた家族宛の書状に、

我等事幼年より高名出世を好み候得共、親の命にて佐原へ養子となり候間、好る所の学文(問)も止め産業第一とし、伊能家の先祖の格言を相守り、終には先規遺命の救民迄も助け候間、功成名遂て身退は天の道と。江戸表へ隠居に及候所、又々古今にこれなき日本国中測量御用仰せつけられ、諸国大名の奔走御取成にて、諸国遍歴致し候は、実に以てありがたき事に候。(以下略)

と、記していることから、伊能家に入ってから忠敬は、第一に家業に励み、好きな学問は止めてしまったとうけとめやすい。

しかし、伊能忠敬の師であり、畏友であった隣村の久保木清淵の代表的な著作であった『補訂鄭註孝経』の序文に忠敬は、

余(忠敬)が故郷にいたるとき、仲黙(清淵)に古文を習った。この頃、命令を受けて海辺の測量をし、大地の図に従っている。故に孝経を考えきわめることができないので、少しその旨を述べて序文にいたします。

と、記している。

このことから忠敬は、佐原時代、清淵から古文を学んだことがわかる。

また、忠敬が三十歳前後に、覇陵(忠敬の莫逆の友・飯高惣兵衛尚寛の号)が認めた東河(忠敬の号)宛の書状に、

旦つ詩稿差し遣わし申し候。御遠慮なき御批判承りたく候、尤も御他見御用捨下さるべく候。

と、記してあることから、その頃忠敬が、詩を嗜んでいたことが推測される。

なお、「書籍目録」に数学や天文暦学の書籍が見られることから、忠敬は、村役人として水害の復旧工事など、職務上、測量術や地図作成の知識技能を修得したことが考えられる。

また、寛政の初期に、忠敬の長女・稲の夫・盛右衛門などに宛てた書状に、暦書の購入依頼の件が認めてあったことや、寛政十二年四月五日付の蝦夷地測量の幕府への請願書「蝦夷于役志啓行策略」に、

前々より天文暦学地図等相学び候所、六か年以前、高橋作左衛門儀御用に付罷下り候節より門弟に罷成、天文暦学出精仕候。

と、記してあり、寛政十二年六月二五日の箱訴吟味の節、忠敬の長男が勘定奉行柳生主膳正に口述したなかに、

父勘解由儀、一鉢算術相好み、天文に心懸け、寛政六寅年より隠居仕り、深川黒江町辺りに罷り有り、浅草天文方手伝いをいたし居り

(以下略)

と、記してあること。

忠敬が佐原在任時に作成した「佐原村粉名口付近実測図」「佐原村本宿・新宿淵岸田地絵図」「佐原村新宿絵地図」が現存していることから、忠敬は、高橋至時に弟子入りする前から天文暦学や地図、算術の学問をしていたことがいえる。

これまで伊能家で所蔵していた「書籍目録」の書籍の内容を裏づける事柄を記述してみた。

伊能忠敬の佐原時代の学問の内容は、書籍内容から推察して、村役人として必要な測量術や天文暦学の基礎である数学、それに少青年期に修めた漢学や詩文が中心であったように思われる。忠敬に数学や測量術の知識を与えた『大成算経』関孝和他著、『拾璣算法』豊田文景著、『点竄算法』坂部広胖著、『規矩分等集』萬尾時春著、『量地指南後編』村井昌弘著等の書籍、それに天文暦学に関係した『天文図解』井口常範著、『古暦便覧』吉田光由著、『貞享暦』渋川春海著など、忠敬は、これらの書籍を購入し、寸暇を惜しんで読み耽っていたのであろう。香取市佐原の伊能忠敬記念館には、これらの図書が現在も所蔵されている、いずれも国の重要文化財に指定されている。

なお、ここで付記しておくことは、「書籍目録」に記述されている書籍で、忠敬が伊能家に入夫以前に、既に収蔵されていたものもあるということである。

伊能忠敬が作成したと思われる「伊能家の屋敷図」には、「文庫土蔵」が記述されている、また、「伊能忠誨日記」（忠敬の孫）によると、毎年六月、或いは七月に文庫土蔵の掃除と、書物の土用干しをしている。なお、伊能家十六代敬氏の生前の話によると、戦中は、戦火から忠敬の遺書遺品を守るために佐原町（現香取市）の親福寺や、親戚の成田町（現成田市）の檜垣家の土蔵などに地図や書籍、それに測量器具を分散して保管して貰っていたとのことである。このような伊能家の歴代の人々の努力と配慮によって、私達は、現在、伊能忠敬・忠誨の遺書遺品を始め、伊能家六代景利が編纂した膨大な資料を閲覧することができるのである。

資料二「書籍目録」の書籍の解説

一 中国の図書

詩経（しきょう）

五経の一つ。中国最古の詩集。国風（各国の民謡）、雅（朝廷の音楽）、頌（祭祀の音楽）の三部門に大別されて、三百余篇が収録されている。「毛詩」ともいう。

揚子法言（ようしほうげん）

楊子は楊雄の尊称。前漢末の学者。成都（今の四川省）の人。晩年王莽に仕えた。文章に優れ、「揚子法言」「方言」「大玄経」などの著者。

賈誼（かぎ）

前漢の学者、思想家。辞賦に長じていた。洛陽（今の河南省）の人。文帝のとき博士になり、大中大夫に進んだ。「新書」「賈長沙集」の著者。

韓非子（かんぴし）

韓非の尊称。もと「韓子」といったが、のち唐の「韓愈」と区別して「韓非子」という。法律が政治の基礎であると説く。二十巻。

王充論衡（おうじゅうろんこう）

王充は後漢の学者。「論衡」の著者。

墨子（ぼくし）

名は翟、墨子は尊称。戦国時代の思想家。学説は、人は平等に愛し、儉約を尊び、戦争に反対するなど儒家と並んで勢力があったが、漢以後は全く衰えた。

佩文韻府（はいぶんいんぷ）

清の聖祖の康熙年間に、張玉書らが勅命によって編集。四百四十四巻。

鶴林（かくりん）

沙羅双樹（さらそうじゅ）の林の別名。釈迦入滅のとき沙羅双樹の林がすべて白く変わったのでいう。

通鑑綱目（つがんこうもく）

「資治通鑑綱目」を略称して「通鑑綱目」という。歴史書。宋の朱熹の著。宋の司馬光の「資治通鑑」について、別に義例をつくって綱目に分けたもの。五十九卷。

左伝（左氏伝）（さしでん）

春秋左氏伝の略。春秋について魯の左丘明が書いたといわれている註釈書。

孫子（そんし）

孫武の敬称。「孫子の兵法」の著者。十三編、一卷。

論語（ろんご）

四書の一つ。孔子が弟子や当時の人に応答した話や、孔子の性行、弟子の言行などを収録。二十編。

孝経（こうきょう）

孔子の弟子の曾子（名は参）が、師から孝道について聞いたことを纏めたといわれている。魯の人。一卷。

尚書（しょうしょ）

書経のこと。五経及び十三経の一つ。尚は上代の意。太古の堯、舜、禹帝から夏、殷、周代の伝説や史実を記したもの。

公羊伝（くようでん）

春秋の注釈書。公羊高が作る。「左氏伝」「穀梁伝」とともに春秋三伝と呼ばれる。

穀梁伝（こくりようでん）

春秋を解釈した書。周の穀梁赤の著。二十卷。

胡氏（こし）

胡安国という。北宋の儒学者。「胡氏春秋」の著者。

爾雅（じが）

十三経の一つ。言語や書物を解説した最高の字書。詩経の語を多く含む。

大学（だいがく）

儒教の經典。四書の一つ。宋の朱熹が整理して注釈をした。学問修養に基づく政治の理想を述べている。

中庸（ちゅうよう）

四書の一つ。もと礼記の一編。中庸の徳を説く。孔子の孫・子思の作と伝えられる。

荀子（じゅんし）

戦国時代の趙の人。尊称は荀卿。「荀子」の著者。二十卷。性悪説を唱え、礼を特に重んじた。

晏子春秋（あんししゅんじゅう）

晏嬰の言行を後人が編集したもの。略して「晏子」という。八卷。塩鉄論（えんてつろん）

原本には、「監鉄論」と記述してある。漢の桓寛の著。前漢の武帝が財政建て直しのため行なった塩・鉄の専売制について、昭帝の命でその可否を論議させたものを記した書。十二卷。

韓詩外伝（かんしげでん）

漢の韓嬰の著。古詩、古語をあげて「詩経」の語を説いたもの。十卷。

劉向（りゅうきょう）

前漢末の学者。経学にすぐれ、子の劉歆とともに目錄学の創始者といわれる。「列女伝」「洪範五行伝」「説苑」「列仙伝」「新序」などを著わし、「楚辭書」「戦国策」などを編集した。

孔叢子（くそうし）

孔叢子（くそうし）

漢の孔鮒の著というが、後世の偽作。孔子の門人の言行を記したものの。三卷。

白虎通義（びやつこつうぎ）

後漢の班固の編。正しくは「白虎通德論」「白虎通」という。四卷。

顔氏家訓（がんしかくん）

北齊の顔之推の著。身を立て家を治める法を述べ、子孫を戒めたものの。二卷。

列女伝（れつじょでん）

前漢の劉向の著。昔からの列女の伝記を集めたもの。七卷。

列仙伝（れつせんでん）

前漢の劉向の著。

西京雜記（せいけいざつき）

漢の劉歆の記録を晋の葛洪が編集した昔からの逸話を集めたもの。

六卷。

搜神記（そうじんき）

晋の干宝の編。神仙・妖怪などの説話集。後世の怪異小説に影響を与えた。二十卷。

世説（せせつ）

南宋の劉義慶の著。初め「世説」、のちに「世説新語」という。後漢から東晋までの名士の逸話を収録したもの。三卷。

山海経（せんがいきょう）

地誌の形式で古伝説を記した書。著者不詳。十八卷。

老子（ろうし）

楚の人、周代の思想家。「老子」は老子の著とされている。「老子道徳経」ともいう。二卷。

列子（れつし）

戦国時代の道家。列禦寇の尊称。その学は黄帝・老子に基づく。「列

子書」の著者であるが偽作と疑われている。「冲虚真経」ともいう。八卷。

莊子（そうし）

戦国時代の道家。莊周の尊称。唐代、南華真人と称された。宋の蒙の人。孟子と同時代。人為を否定し、自然と一体となることを唱え、孔子の主張に反対した。「莊子」は、莊子の学説・言行を記したもの。三十三編。そのうち内編七編以外は後人の作といわれる。別名「南華真経」

華真経

管子（かんし）

管仲の尊称。周代、管仲の著と伝えられる。後人の加筆した部分が多い。治国経済政策などを記す。二十四卷。

呂子春秋（りよししゅんじゅう）

秦の呂不韋が、多くの家臣や賓客を集めて編集した雑書。二十六卷。

商子（しょうし）

戦国時代の法家の書。衛の商鞅の著という。別名「商君書」。五卷。

抱朴子（ほうぼくし）

晋の葛洪の著。抱朴子はその号。神仙術や道家の言説を集めたもの。八卷。

飛燕外伝（ひえんげでん）

飛燕は、前漢の成帝の皇后趙氏の号。その妹の合徳（昭儀）と天子の寵愛を争う物語。「飛燕外伝」一巻が伝わる。

呉越春秋（こえつしゅんじゅう）

春秋時代、隣り合わせて長い間戦争した二つの国。呉王夫差と越王勾践が争った記。

戦国策（せんごくさく）

漢の劉向の編。戦国時代、遊説家が諸侯に説いた政策を国別に集録した書。旧名「国策」三十三編。

十八史略（じゅうはつしりやく）

元の曾先之の編。十七史と宋代の各種史料から抜粋して、太古から宋末までの中国史を略述した初心者向きの史書。七卷。

明史（みんし）

明代の正史。清の張延玉らが世宗の勅命によつて編纂したもの。二十四史の一つ。三百三十六卷。

後漢書（ごかんじょ）

後漢の正史。南北朝時代の宋の范曄の編。百二十卷。

晋書（しんじょ）

唐の太宗の勅命により、房玄齡らが編修した西晋・東晋の正史。百三十卷。

三国志（さんごくし）

晋の陳寿の著。魏・蜀・呉の歴史を各国別に書いたもの。六十五卷。本草綱目（ほんぞうこうもく）

明の李時珍の編。千八百八十二種の薬物名と、八千の処方とを収めた中国の代表的な本草書。「本草」とは、草木、植物、あるいは薬用にする植物、動物、鉱物の総称。

素問（そもん）

「黄帝素問」の略。最古の医書で、黄帝と名医の岐伯の問答を記したものの。著者不明。二十四卷。

淮南鴻烈（わいなんこうれつ）

「淮南」は、淮水（川の名）以南の地。「鴻烈」は、淮南子の別名。「淮南子」は漢の高祖の孫、淮南王劉安が学者たちに作らせた書。老莊思想を中心に多くの学説を総合したもの。二十一卷。

孟子（もうし）

戦国時代の鄭の人、孟子の言行をしるしたもの。四書の一つ。十四卷。毛詩（もうし）

「毛詩」は詩経の別名。漢初の毛亨と弟子の毛萇によつて伝えられたのという。

淵鑑類函（えんかんるいかん）

清代の事典。康熙年間、張英らが勅命によつて編集。人事、自然の故事の集大成。四百五十卷。

文章規範（ぶんししょうきはん）

宋の謝枋得の編。官吏登用試験の受験者のために、作文の規範となる文章六十九編を集めたもので、「出師度」「帰去来辞」など。七卷。

楚辞（そじ）

楚国の文学の意で楚の大夫屈原の作品と、後人が屈原に倣つて作った作品を集めたもの。「楚辞」は、南方文学を代表する。前漢の劉向の編という。

歐陽詢（おうようじゅん）

初唐の書家、隋に仕え、のち唐に仕えた。王羲之の書風を学び、ついに一家をなした。

千字文（せんじもん）

梁の周興嗣の編。四言古詩。二百五十句。同類書に「広千字文」「易千字文」がある。

唐詩選（とうしせん）

明の李楚竜の編という。唐代の百二十七人の詩を、古詩、律詩、排律、絶句に分けて集録したもの。七卷。

蘭亭序（らんていのじょ）

王羲之の著。東晋の書家、書聖といわれ、草書・隸書では古今第一。奈良平安時代の書は、彼の書を源流とした。

漢書（前漢書）（かんじょ）

班固の著。前漢十二代の史書。「前漢書」ともいう。書経（しよきょう）

政治に関する記録。孔子の編修といわれる。五経の一つで別名「尚書」ともいう。

近思録（きんしろうく）

朱熹・呂祖謙の共編による修養書。十四卷。

楽訓（楽経）（がつけい）

六経の一つ。音楽の理論を述べたものらしいが、秦の始皇帝の焚書のため滅びたといわれ、今日伝わらない。

史記（しき）

前漢の司馬遷の著。上古の黄帝から前漢の武帝までの紀伝体の歴史書。最初の中国正史。百三十卷。

小学（しょうがく）

宋の劉子澄が、朱熹の指導によつて編修した道德の書。六卷。

四書集注（ししよしつちゅう）

「四書」は、儒教の四つ（大学・中庸・論語・孟子）の經典。「四書集注」は、宋の朱熹の書で、四書の注釈書。十九卷。

論語集解（ろんごしつかい）

三国時代の魏の何晏の著書。

礼記（らいき）

五経の一つ。古代の礼儀に関する説を収める。戴聖が再編。四十九編。

算法統宗（さんぽうとうそう）

明の人、程大位が文禄元年刊行、そろばんの書。日本に渡来して和算の発達の一つのきっかけを与えた。

算学啓蒙（さんがくけいもう）

元の人、朱世傑撰。印度、ヨーロッパ流の記号代数ではなく、算木を使う一種の代数学で中国独特のものである。日本の和算の源となる。正安元年頃刊行。

天経或問（てんけいわくもん）

中国の遊子六著。天経とは、天と違わずこの書の論ずることは確実であるという意味で、或問とは、質問に答える形式であるという。天文学一般、地理、気象について記述してある。

二 日本の図書

○ 古典

東鑑（あずまかがみ）

鎌倉幕府によつて編まれた編年体の歴史書。五十卷。治承四年源頼朝の挙兵から文永三年惟康親王が將軍になるまでの八十七年間にわたる鎌倉幕府の事跡を書いたもの。編年体とは、歴史を記述する一つの形式。年代の順に従つて書き記す法。

徂徠（そらい）

荻生徂徠、江戸中期の儒学者。初め「朱子学」を学び、のち古文辞学を主張。「論語徴」「弁道」の著者。

大和本草（やまとほんぞう）

貝原益軒著。宝永五年成立。中国の「本草綱目」所蔵のものに、日本特有のものや外国産の動植物千三百六十二種を分類し、その名称、起源、形状、効用などを説明したもの。

古語拾遺（こごしゅうい）

斎部広成著の歴史書。一卷。大同二年成立。神代からの自家に関する歴史をつづつたもの。

和漢三才図会（わかんさんさいぐえ）

江戸時代に、大阪の医師寺島良安が、明の王圻の著である「三才図会」にならえ、天文、地理、人物、動植物などを絵入りで解説した百科全書。百五巻。

今昔物語（こんじやくものがたり）

平安末期にできた説話集。源隆国の作といわれる。天竺（インド）・震旦（中国）・本朝に分けて古今の雑話を集録している。三十一巻。大日本史（だいにほんし）

徳川光圀の編著。神武天皇から後小松天皇までの歴史を紀伝体の漢文で書いたもの。幕末の勤王思想に影響を与えた。三百九十七巻。「紀伝体」とは、歴史の書き方の一つ。本紀（天子のことを記す）と、列伝（重要人物の伝記）とを中心とする記述法。

日本書紀（にほんしよき）

奈良時代にできたわが国最古の官撰の歴史書。舎人親王、太安万侶らの編。七二〇年（養老四年）成立。

伊勢物語（いせものがたり）

平安時代の歌物語。一卷。作者不詳。在原業平の家集を基にして作られたもの。

沙石集（させきしゅう）

無住法師編の説話集。十巻。弘安六年成立。仏教説話だけでなく、笑話、こっけい談を収めている。

古今和歌集（こきんわかしゅう）

最初の勅撰和歌集。醍醐天皇の命により紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人の奏進。二十巻。

方丈記（ほうじょうき）

鴨長明著の随筆。一卷。建暦二年成立。

保元平治の乱（ほうげんへいじのらん）

平安末期、貴族間の政権争いがもとで京都に起こった内乱。「保元物語」は、鎌倉初期の軍記物語。三巻。作者、成立、年代ともに不詳。

保元元年の保元の乱のいきさつを記したものの。

源平盛衰記（げんぺいせいすいき）

作者不詳。鎌倉時代中期以後に成立。

阿羅野（曠野）（あらの）

山本荷兮撰。三巻。芭蕉以下の発句七百三十五句と、歌仙十巻を収める。

三十六歌仙（さんじゅうろくかせん）

一条天皇のとき、藤原公任が選んだという三十六人のすぐれた歌。

○ 数学

大成算経

天和三年夏に、関孝和、建部賢明、建部賢弘の三人が相談し、数学全般にわたる総合的な専門書を作ろうということになり、天和の末より宝永の末年までの約三十年かけて作った書物。二十巻。

算法天元録

泉州の人、西脇利忠の編著。算木を使った解答法で正徳五年に刊行。

算法古今通覧

会田安明の編著。寛政九年刊行。関孝和、建部賢弘など、著名な数学者の図書が記述されている。

算法算組

村松茂清著。寛文三年に刊行、それによって円に正 $2n$ 角形を内接して円周率を求める方法が確立した。

算法廓如

会田安明が寛政九年に刊行。関流算法について述べている。

算法得幸録

岸通昌著。安永二年刊行。

開成算法

奥州二本松の人、三宅賢隆の著。享保元年に発行。五巻。

拾璣算法

久留米藩主有馬頼僮（豊田文景）が明和六年に刊行。点竄術、及び

その後の高等数学書の指針となった書。

点竄算法

坂部広胖が文化十二年に刊行。点竄の問題が集大成され、対数表、球面三角法、楕円周などが論じられている。点竄法は、関孝和がはじめて述べた法で、筆算によって今の代数学の計算を行う方法。

演段諺解

数の問題や図形の問題の解き方が記されている。

量地指南後編

伊勢の人、村井昌弘の著。量地指南後編は五巻からできている。甲州流（武田流）の測量術が記されている。

規矩分等集

萬尾時春著。萬尾は、丹波国篠山の藩主で、通称を六兵衛といい、村井昌弘の弟子であった。「見立算規矩分等集」ともいい、山海、国城、遠近、高低、広狭、厚薄、その外勾配の規矩分等について記している。

算法指掌

常州水戸の人、石山正盈の編著。寛保八年刊行。定位の術、方程正負、鈎股法、算木縦横之解などが記されている。

和漢算法大成

宮城清行が享保三年に再刊。算木や算盤を使用し、演算の方法がしめされている。

○天文曆学

天文図解

京都の人、井口常範が元禄二年に編、並びに撰。古今天体図、日月交食、曆術、二十八宿旋度などが記されている。

授時曆経諺解

亀谷和竹撰。亀谷は、周防国徳山藩の家臣で、字は小兵衛といった。

正徳元年に授時曆経諺解七巻を刊行。初めの四巻は、授時推算法に解説を加えたもの。後の三巻は、立成である。藩主毛利元次が出版費用をだして発行させる。

授時曆図解發揮

近江国の中根元圭の弟子であった林正延が宝永四年に授時曆図解發揮を著わし、元禄十六年に小泉光保が刊行した「授時曆経図解」の誤りをあげて批難した。

貞享曆

貞享元年の渋川春海の著。元の郭守敬の造った授時曆と遊子六の天経或問を基にして、実験をし、その資料を使った曆法である。

宝曆甲戌曆

宝曆四年、甲戌の歳に採用が決まり、翌五年より寛政九年まで四十二年間行用された曆法である。

皇和通曆

正徳四年に中根元圭が刊行。長年にわたる歳次、月の大小、閏月、朔の干支、二十四節氣、日月食など、曆本の要所だけを抜粋して一覽できるようにした書。

皇倭通曆蝕考

千葉歳胤が明和五年に刊行。神武天皇元年から貞享元年に至る二三四四年間の日月食の食分と食甚時刻を推算した交食便覧ともいえる書。

古曆便覧

古曆便覧は、日本には古くからあり、寛永年間に出た著者不明の古曆を始め、吉田光由の「古曆便覧」、無求子の「続古曆便覧」、中根元圭の「新撰古曆便覧」、中西敬房の「増続古曆便覧」など、今までに数多く刊行されている。古曆便覧は、人々に使用されやすいよう

に暦の要点を抜抄したもの。

日東通暦

大和国の人、杉村長郡が一般の人の使用のために、暦の要点を抜抄した古暦便覧である、

蝕算活法

千葉歳胤が中根元圭に師事し、暦学を学び、明和三年に百八十五巻から成る蝕算活法率を刊行。蝕算活法率引、活法暦などを記述。

暦学法数原

京都の人、中西敬房が天明七年に刊行。法原門、数原門などが記されている。

(完)

【参考図書】

漢和辞典

赤塚忠・阿部吉雄編

旺文社

大辞泉

松村明監修

小学館

広辞林

三省堂編修所編

三省堂

和算の歴史

平山諦著

至文堂

近世日本天文学史

渡辺敏夫著

恒星社厚生閣

玉川新百科(数学)

誠文堂新光社

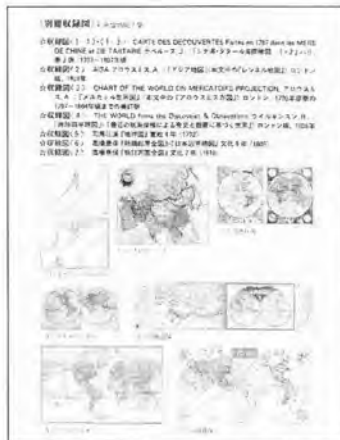
(さくまたつお・伊能忠敬研究家)

お知らせ

季刊「多摩のあゆみ」一二八号「特集 江戸時代の多摩を歩く」に佐久間達夫氏の論文「伊能忠敬測量隊の東京多摩地区測量」が掲載されました。たましん本店・支店の窓口で無料配布中。

(問合せ先：たましん歴史・美術館歴史資料室 〇四二―五七四―一三六〇)

近刊紹介



二宮陸雄『高橋景保と「新訂万国全図」 - 新発見のアロウスミス方図 -』 + [別冊収録図]

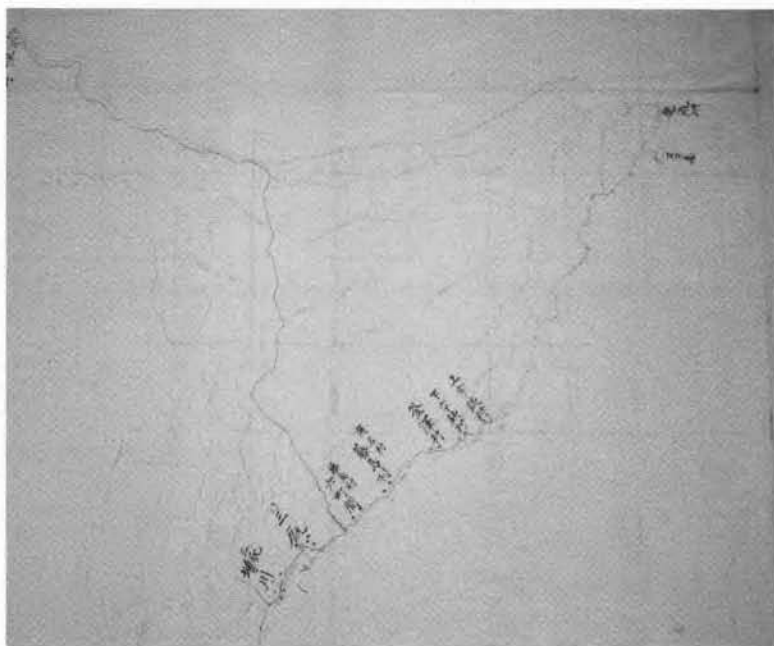
北海道出版企画センター刊

伊能大図総覧の地名と景観(四)

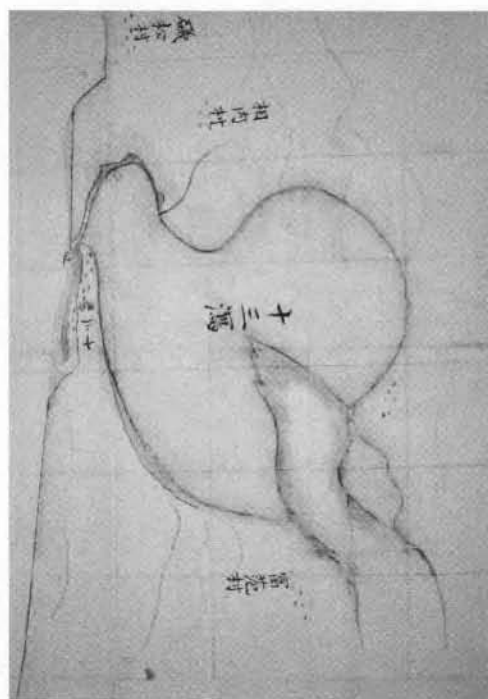
星 埜 由 尚

今回は東北地方日本海側の伊能大図を見ていくことにしたい。

津軽半島・十三湖



第 1 図 大図 38 号 津軽半島竜飛岬



第 2 図 大図 38 号十三湖

津軽半島は、第三次測量において、享和二年（一八〇二）八月に油川、三厩、小泊、十三町と測量している。三厩から半島を横断し、津軽半島西岸の小泊まで一日で測量を行っている。この測線を現代の地形図に落としてみると、地形図に見られる地名「六条間」は、大図の六町間に当たる。大図には記載がないが、地形図に記載されている算用師川に沿って谷を遡行し、算用師峠（地形図に記載されているが、大図には見られない）を越えて西海岸に出たのである。測量日記には、「谷間細道にて、草木茂り湿気おほく」、「溪水の流れを道とし、浜り行くこと長し。それより算用師峠を上る。」とあり、符合する。

竜飛岬を巡る測線は描かれていない。六町間から上宇鉄村まで測量しているが、その先は、測量困難であったのであろう。上宇鉄村には番所があった。測量日記によれば、六丁間村家六軒、藤嶋村家七軒、釜野沢村家四軒、下宇鉄村家七軒とある。小さな村が続いていたようである。竜飛岬には、上宇鉄村から船で眺めたことが測量日記に記さ

れている。竜飛岬を測ると述べられているが、船から遠望したのである。竜飛岬に到る海岸には、多数の小点が描かれているが、おそらく遠望した岩石海岸の様子を描いたのであろう。

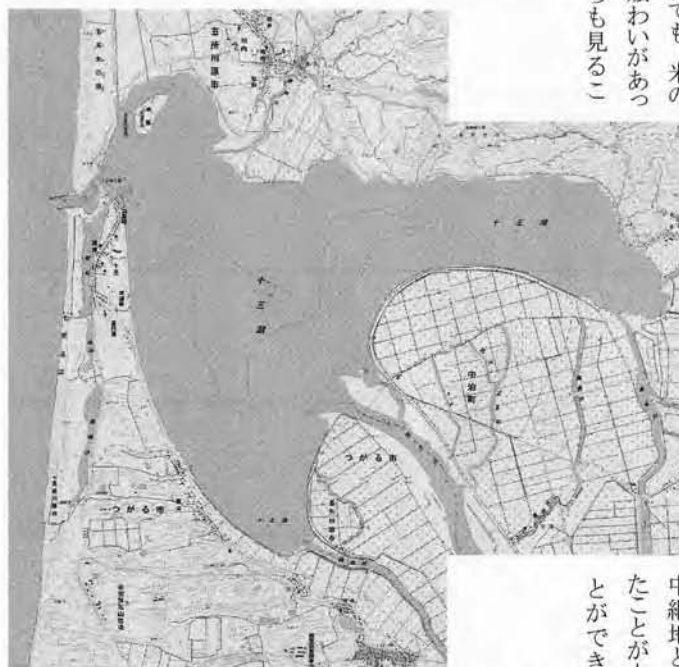
第2図は、十三潟（現在の十三湖）周辺の大図である。十三潟と日本海に挟まれた砂州の上に十三町と記された集落があり、湊の記号もある。この十三町は、中世におけるこの地方の有力な豪族安藤（東）氏の元で栄えた十三湊である。十三潟の周囲は十三町と相内村、富范村の間を測るのみで湖の全周は測量されていない。しかし岩木川の三角洲の姿や湖岸線などの形の特徴は良く捉えられている。



第3図 2万5千分の地形図「三厩」「竜飛崎」「小泊」

湖岸に沿って薄墨色の塗色があり、湖岸は干潟状の低湿地となっていたのであろう。

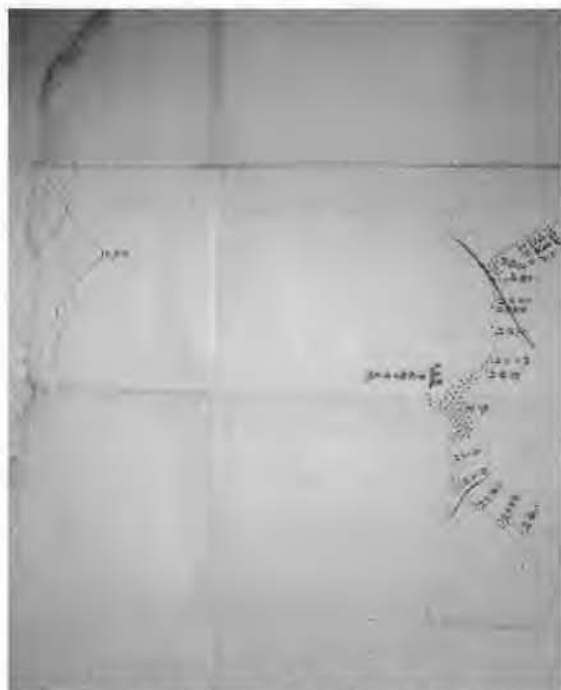
測量日記によれば、磯松村家二十四軒、相内村は家六十軒、十三町は家一六九軒とあり、「十三町より四里海辺に人家なし」との測量日記の記載から見ても、比較的大きな集村のほかには、人家のない海岸の原野の様子が目に浮かぶようである。十三町は、集落記号の黒抹も多数描かれ、近世以降は、飛砂により港が浅くなり往時の繁栄から衰退したと言われているが、江戸時代には、岩木川を小舟で運ばれた米を鰯ヶ沢に運ぶ中継地としての機能を果たしていた（十三小廻し）。伊能測量当時の十九世紀初頭においても、米の販わいがあつたことが大図とができる。



第4図 2万5千分1地形図「津軽相内」「薄市」「車力」

弘前・岩木山

弘前は、伊能測量当時津軽氏四万七千石の城下町であった(文化五年(一八〇八)に十萬石となった)。弘前には、多数の黒抹記号と城が描かれている。弘前城には、五層の天守閣があったが、寛永四年(一六二七)に落雷のために消失し、文化七年(一八一〇)に本丸辰巳櫓を改築し、三層の天守閣が再建された。伊能測量当時は、北方におけるロシア出沒の影響が津軽藩にも直接及んだ時期であり、蝦夷地警備や台場築造などの対策に躍起となっていた時期である。その所為かどうか分からないが、測量日記には、津軽藩の対応が良くないこと、藩主が青森に滞在していることなどが記述されている。大図に描かれている弘前城は、天守閣が再建される直前であり、図案化もされているので断言はできないが、いくつかの櫓を描いているものと思われる。



第5図 大図43号 弘前・岩木山



第6図 2万5千分の1地形図「弘前」

弘前と相對するような形で岩城山(岩木山)が描かれている。岩木山は秀麗な目立つ火山であるので、多数の地点から方位を測量されている。大図での表現もその形の特徴を良く捉えている。山頂の位置は測量された位置であるが、その形はスケッチであり、図案化されている。山裾の部分には雲のようなものがたなびくように描かれており、当時の絵の描き方の影響を受けている。アメリカ大図では、線描で描かれているのみであるが、焼失した元図では、彩色され美しく描かれていたはずである。

秋田・男鹿半島

第7図は男鹿半島先端の戸賀岬、一、二、三ノ目潟の図である。男鹿半島の西海岸は、海蝕崖が発達し、断崖が連なるため、海岸線の測量はできず、測線は戸賀湾の部分だけ海岸線と一致するほか、かなりの陸側を通過している。一ノ目潟、二ノ目潟、三ノ目潟は、その周囲が測量されているわけではないが輪郭が描かれている。第九図の地形



第7図 大図62号 男鹿半島

図と比べてみると、一ノ目潟は、実際の形より大きく、二ノ目潟は小さく描かれている。三ノ目潟が最も正確に描かれているようである。測線は、加茂村で途切れている。測量日記によると男鹿半島の測量は、伊能秀蔵と尾形慶助らが分かれて行った。加茂村から先は男鹿半島北岸の北浦村まで戻り宿泊している。

加茂村の東には、本山、新山という二つの山が描かれており、山頂には、+の印があり、山頂の方位が測られていることが分かる。測量

日記によると、「真山 此所赤神山」として、更に「光飯寺あり 久保田より百石寄付 山上に客神権現あり 真言宗なり 門前山上に 本山あり」と記されている。また、さらに「五社大権現、赤神山 永禅院、久保田寄付百七十一石、真言宗」の記載がある。現在の地形図を見ると、真山、本山ともにその注記があり、山頂には、神社がある。本山の神社には赤神社の注記がある。寺院の注記はない。



第8図 2万5千分1地形図「戸賀」

本山への登山道は現在東北自然歩道となっており、麓に五社堂がある。これが五社大権現であろう。五社堂は、正式には、赤神社五社堂という。大図には、「真山」が「新山」となっており、「新山」の北には、屋根を大きく書いた家形が描かれており、光飯寺、永禅院を表しているのだろう。これらの位置関係は正確ではない。「新山」、「本山」ともに西にずれている。これらの寺院は、おそらく明治の廃仏毀釈によりなくなってしまったのであろう。

加茂村から小浜村まで約二里の間は不測と測量日記にも記されており、測線もこの間は途絶えている。大図には、この間の海岸線がいかに陰しように線描で表現されており、正本では、色彩豊かに断崖状の海蝕崖が描かれていたのではないだろうか。

第9図は秋田・土崎周辺の大図である。秋田は当時久保田と言っていた。享和二年七月二〇日に久保田、9月5・6日土崎に宿泊している。

秋田と土崎の間には、谷橋村と寺内村とがあり、現代の20万分1地勢図を見ると八橋と寺内の注記を見ることが出来る。八橋は、嘗て石油が産出し、学校の地理の授業で八橋油田と教わったものである。第10図にも赤い油井の記号に気がつく。現在は、帝国石油株式会社の八橋油田があつて稼働しているが、もとより明治以降に採掘が始まったものであり、伊能測量当時にはその様なことは露知らずであらう。



第9図 大図第62号 秋田付近

※佐久間達夫「伊能忠敬宅測量日記羽越測量篇」



第10図 20万分1地勢図「秋田」

測量日記を「読むと、北に向かって相染村、穀町村、飯島村、中野村と通過するが、左側即ち西側は草砂原などと記述され、街道の東側は田畑、西側は砂地の草原が広がっていたようである。八郎潟の出入り口の砂州の上に立地する天王村と土崎の間には、人家なしと記述されており、海岸はことごとく白砂で広さ十丁から二十丁に及ぶと書かれ、「高卑砂原なり」との記述は、砂丘の広がる荒涼とした海岸であったのであらう。

土崎は、「家一二五〇軒余、寺院十五ヶ所、諸国入舟おほし」と記され、大きな湊町であった。大図の表現を見ると、雄物川河口の三角状に描かれている。現在は、埋め立てなどにより河口部も変化しているが、広い河口の形など伊能測量当時の形をとどめている。現在の

雄物川は、大図に新谷村と出ている新屋で分水路が作られており、伊能測量当時の雄物川は、旧雄物川として残っている。

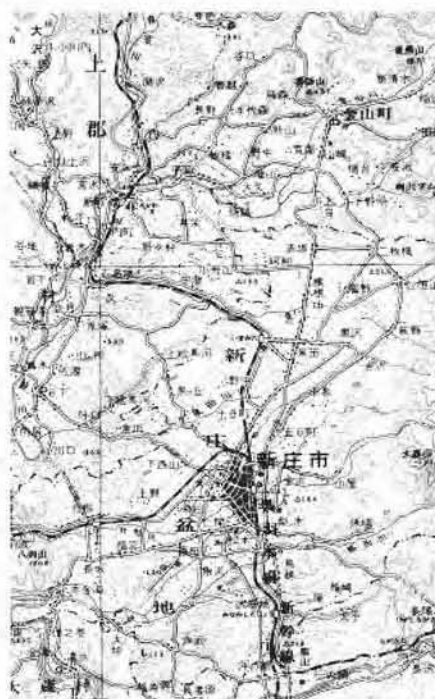
また、大図 62 号の南端には、僅かに北半分の湖が描かれており、大図 63 号には海老沼と言う名称が記載されている、そのほとりに仁井田村があるが、現在の地形図でそれらしい池を当たっても見つけることができない。仁井田と言う地名は現存するが、水田が広がっており、海老沼は埋め立てられたのであろう。

新庄・山形・米沢

享和二年（一八〇二）の羽越測量において、六月十一日（七月十日）に江戸を発った忠敬は、奥州街道から茨城街道を通り会津若松を抜けて七月五日には米沢、八日には山形、十一日には新庄に着いている。米沢・新庄間は一〇〇 km を越えているので、一日約二〇 km を測量したことになる。

第 10 図は、山形県最北部の新庄から金山の大図である。国会図書館蔵の彩色図の北限である。新庄は、外様大名戸沢家の城下町である。戸沢富壽居城と記され、天守閣のような城郭の絵が描かれている。新庄では、月山、鳥海山等を測っている。新庄の城下では、測線が折れ曲がっており、城下の街道が防禦のために屈折していることがよく分かる。戸沢氏は、山形藩主最上氏の改易後新庄藩を立藩し、以後明治の廃藩置県まで続いた。六万八千石という中規模大名であったが、譜代格を与えられ、藩主一族の墓所である七棟の霊廟（御霊屋）が国史跡として残っている。

新庄から北に向かって太田村、荒小屋村、泉田村、萩村赤坂、上臺村、山崎村、金山と続くが、すべて現在も実在しており、地形図には記載されている（太田村は地勢図では省略されているが、2 万 5 千分



第 12 図 20 万分 1 地勢図新庄・金山



第 11 図 大図 65 号 新庄付近

第13図 新庄藩御霊屋



第14図 金山



1 地形図には掲載されている。これらの村々は、測線に沿って家並みが描かれているが、現在も国道7号線に沿って集落が続き伊能測量当時の村を引き継いでいる様子が窺える。御霊屋は、太田村にある。

金山は、明治十一年にイサベラ・バードが訪れ、ロマンチックなところだと賞賛したことでも有名である。伊能測量の当時も同じように美しい風景であったであろう。測量日記には、その様な記載はないが、泊まった本陣問屋の家作は良かった、家は六〇軒ほどである、宿外に有屋川ありと書いている。有屋川は現在金山川と呼ばれており、金山より上流に有屋という集落がある。

享和二年（一八〇二）七月八日一行は山形城下に着いた。測量日記によると、城下入口から足輕先払、町役人棒突大勢出るとあり、仰々しい迎え方であったようである。山形は、五十七万石の大大名最上義光の城下であったが、最上義光没後の内紛により改易された後、左遷大

名の領地となり、藩主はめまぐるしく代わり、伊能測量当時は、秋元但馬守であった。測線沿いの村々の領主名が記入されているが、秋元左衛門佐領分と書かれ、城にも秋元左衛門佐居城と書かれている。測量日記には、秋元但馬守と記されており、官名を2つ持っていたので



第16図 大図67号米沢付近



第15図 大図66号山形付近

あろうか。また、近傍には、堀田相模守領分と書かれた村もあり、秋元家の2代前の藩主堀田家の領地も散在している。

大図には、蔵王山のほか奥羽山脈の山々が描かれている。二口越、笹谷峠は、峠と言うより山頂が描かれている。この2つの峠に比べ、

蔵王山は小振りである。蔵王山の前山である瀧山^{りゅう}は、竜山と記されている。二口越は現在の瀬ノ原山、笹谷峠は現在の雁戸山に当たっているのではない。

米沢には、会津から松原峠を越えて到着した。このときも徒士先松、町役人案内があったと測量日記には記されている。米沢は、戦国武将上杉謙信の末裔の城下町である。名君上杉鷹山は、このときには藩主治広の後見人として健在であった。米沢の城下では、測線が屈曲し城下町の様子が窺い知れる。

(第1, 2, 5, 7, 9図はアメリカ議会図書館蔵、第11, 15, 16図は国立国会図書館蔵の大図の一部である。『伊能大図総覧』から部分転載した。国土地理院発行の2万5千分1地形図及び20万分1地勢図を使用した。)

(ほしの よしひさ・(社) 日本測量協会副会長 代表理事)

一 忠敬先生をめぐる日々話題一

2007. 11. 30 毎日新聞都内版



ハイジの事件簿 ブログより

「富岡八幡宮に近代日本地図の祖、伊能忠敬の像あり！東京江東区の富岡八幡宮には、とっても感じの良い伊能忠敬像があるのです！」

伊能忠敬の血を引くキャディーさん 新聞とブログ

落語家・立川志の輔さんが伊能忠敬の子孫というキャディー一、伊能恵子さんを紹介。忠敬先生の血を引いてか歩測のブログであらゆる場所からピンまでの距離を歩測して伊能メモを作成とか。ブログ「ピーピングしのすけふしあなから世間」

追悼 大友正道さん最後の仕事

しめなわ百科



『しめなわ百科』の刊行によせて

福田 弘行

大友さんから「暑氣払い」のお誘いがあったのは六月五日でした。柏のお住まい近くの居酒屋で、焼酎を片手におおいに語り合いました。話題は映画『ALWAYS 三丁目の夕日』。昭和三十年代を舞台にしたこの映画には、半分だけ建ち上がった東京タワーがその時代のシンボルとして登場しています。大友さんは大手建設会社の若手技術者として東京タワーの設計、施工を担当した当事者。現場で東京タワーを見上げ、建ち上がるのを楽しみにしていたというから、タワーには思い入れが深い。私が社会へ出た頃でした。当時の国電は田町から浜松町にかけて東京タワーが空に延びていく風景は記憶に鮮明です。

「建築屋さんは仕事が残るから素晴らしいお仕事ですね」という私の言葉に、大友さんはわが意を得たりという表情で頷く。永年の研究であるしめなわの本について尋ねると「大部分はまとまった本を出すこともないね、それほどのものでもない」と冷めた返事。「でも、世の中にあまりお目にかからないテーマなので、是非会員には紹介して下さい」とお話した。六月二十四日の総会には出席され、お元気そうに見えた。しかし後日のメールで「肺がんで治療中だがX線も抗がん剤も使えず、対症療法しかない」ことを知らされた。「高齢者のがんは様子見もありますよ。あまり心配しないで」と返信。

十月十八日『しめなわ百科』が送られてきた時には、「本を出版されるほど元氣になられたのか」と思ったが、『あとがき』に、運命のいたずらか、筆をとる体力氣力ともに急に衰えとあるのを読んで、その後の症状に心配が膨らみましたが。

「編集にあたり取材したしめ縄は全国に四千強で、神社の数八万社に比し、九牛の一毛に等しいが傾向は把握された。今後、しめ縄がどの様に伝承され推移して行くのか、衰微の傾向が見られる現状をふまえ、将来に亘り余りにも心配である」と書かれていました。

忠敬さんは全国測量で各地の神社仏閣に立ち寄っている。この本で大友さんが訪れた神社と重なるところがある。どうぞ、彼の地でおふたりの「しめなわ談義」をこころゆくまでにと願います。

大友さんには研究会のホームページの創設とその後の運用にお力を頂戴し、昨今の緊急事態にも冷静に対応されました。最後のお仕事『しめなわ百科』は注連縄研究会編となっています。大友さんご自身の名前は深くしまわれました。後世に残した多くの足跡は偉大です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。
(前事務局長)

出雲大神宮 拝殿

富岡八幡宮 拝殿

川崎大師 大本堂

d 三つ編み

いわゆる三つ編みにしたものの。垂れなどの比較的細い縄繩にいられると見過ごすこともあ



シーボルト事件の背景と間宮林蔵（一）

「林蔵は密告していない」

大谷 恒彦

編集部注 本稿は平成七年に「鳴滝紀要」で発表され、平成十四年には「間宮林蔵顕彰会論集」で知られています。忠敬の弟子、林蔵の再発見の貴重な論考として二回に分けて紹介します。大谷さんと間宮林蔵顕彰会のご配慮にお礼申し上げます。

はじめに

現在、「第三次開国」を迫られている日本は、一方で、再び北方への関心を高めざるをえない国際環境下におかれている。

十九世紀初頭、ロシアの北辺への触手が直接のきっかけとなった第一次開国騒ぎが表面化した数十年間は、日本の鎖国の夢を打ち破ろうとする欧米列強の圧力が次第に強まる中、徳川幕府はその対応に苦慮し続けた。その真つ只中ともいえる一八二八（文政十一）年、最近、一部の研究者が強調する「実測カラフト地図などの国外流出に象徴される国家機密漏洩事件」——いわゆる「シーボルト事件」なる不可解な国際事件が発生した。

事件が発覚したのは一八二八年九月十八日。終息したのが翌年の九月二十五日。地震でいえば、震源地は江戸・長崎。その震動は一年間続いた。したがって、人的被害も大きかったが、この事件を契機に、世界の進運に倖さず鎖国政策の矛盾が一層露呈され、開国への機運が

さらに促進された。

だが、今なお、「シーボルト事件とは一体何だったのか」という疑問を残したまま、発覚の端緒を作ったとされてきた間宮林蔵が結局、一番貧乏くじを引かれたまま、一件落着いた形となっている。

しかし、私は間宮林蔵没後満百五十年の記念すべき年にあたる平成六年になって、遅きに失しはしたが、この半ば常識化している「林蔵密告説」に改めてメスを入れ、林蔵の名誉回復のため、歴史的・合理的な立場で、かねての私見をまとめておこうと考えた。

今回は、その順序としてまず、「シーボルト事件」の主役たちのうち、表面に出ていた人々——シーボルト、高橋景保、最上徳内、間宮林蔵らのかかわり合いを確認しながら、いくつかの問題点をクローズアップし、「事件」の本質解明に、いささかなりとも、新しい視点を提示してみようと思う。

ただ、林蔵の生誕地・茨城県筑波郡伊奈町（現、つくばみらい市）から発信できる情報（資料）は極端に少ないので、林蔵の動静などについては、いくつかの推論が入り込むことをお許しいただきたい。

また、それらの推論については、秦新二氏が発掘・公表された貴重な資料を数々引用させていただいているので、まずはじめに、謝意を表しておきたい。

① シーボルト事件の主役たちがもつ「つながり」の必然性と偶然性

間宮林蔵は、いずれの研究書を繙ひもといても「百姓の子孫で二人つ子」と記述され、その出自について「武將の直系」と明記したものは皆無に近い。しかし、林蔵が八代やがば遡った元祖・間宮隼人——一五九〇（天正十八）年、豊臣秀吉と徳川家康が小田原城を攻略した際、支城・山中城を守っていた父・豊前守康俊らに従ったが、破れて隼人のみが落



シーボルト事件の主役ならびに地理・天文の関連人物

ち延び、常陸国筑波郡上平柳村（現伊奈町上平柳）に帰農した——の末裔であることはまず間違いない。この歴史的経緯の一部は一七八三年（天明三）刊の「北条五代実記」を底本とした「小田原北条記」にも記録されている。

林蔵が師・伊能忠敬から「日本に希なる大剛の者、非常の人」と称えられた、単独行によるその業績・カラフトおよび対岸大陸・黒竜江流域の探検と地図作りを成功させるのに必要な資質——頑健さ・根性・頭脳のよさ・絵心など——はすべて「武將の血」の中から受け継いだものとみてよい。ただの百姓の子供ではなかったのである。

さて、事件の表にいた人々とその裏に隠れていた関連人物を合わせ、まず取りあげるべきは、日本最古の実測地図を完成した伊能忠敬とその師・高橋至時、その嫡子・景保、そして、その間接の配下で、カラフト・蝦夷図を十四年かけて作り上げた問宮林蔵の四人。林蔵は忠敬の弟子であり、景保は父至時亡きあと、忠敬の上司でもあった（表参照）。このように、この四者は、「父子」「師弟」「職場の上下」として、それぞれ特別な間柄であった。封建社会ではいったん、そうした特別な関係が生ずると、余程のことがないかぎり、お互いその立場を尊重し協力し合うことが厳しく義務づけられていた。

また最上徳内も北方の権威、地理のベテランで、同じ分野の林蔵の大先輩であった。

忠敬と林蔵の師弟関係は、忠敬が蝦夷地東南海岸の測量を始めた一八〇〇（寛政十二）年から日本全図完成まで終生続いたし、徳内と林蔵の間でも、一八〇八（文化五）年三月、林蔵が第一回カラフト探検に出発する直前に宗谷で、またその帰途の閏六月、シラヌシで会い、二度にわたって徳内から数々の教示を得て以来、長年にわたって友好関係を保った。

一方、一八〇七（文化四）年十月、初代の松前奉行に任命された村垣淡路守定行は、御庭番（將軍直属の隠密）出身の「北辺の長官」で、一八一八（文政元）年には、勘定奉行に昇進している。また村垣奉行のあと、一八二〇（文政三）年頃から一八二二（文政五）年にかけて松前奉行を勤めた高橋越前守重賢は、シーボルトが来日した翌年の一八二四（文政七）年には長崎奉行の要職にあつて、元部下であった最上徳内らのことをシーボルトに紹介している。

また、林蔵が一八〇八（文化五）年、第一回探検を命ぜられたのは、高橋重賢（当時、松前奉行所勘定吟味役）の推せんによるものとされ

ており、北辺のトップらと林蔵がたまたま密接な関係にあったというだけでなく、「普請役」という職務の中に課せられていた国事探偵「隠密」業務の遂行を通じて、気脈を通じていたとみることが出来る。

さて、一方、事件の最大の容疑者として逮捕され、獄中で病死後、なおかつ断罪された高橋景保は一八〇四（文化元）年、弱冠二十歳で父至時の跡目を継いで「天文方」となり、測量御用も担当、次々に地図を完成させ、一八一四（文化十一）年には書物奉行も兼務、当時の花形学者・幕吏になった。時に景保三十歳。

景保は、世界の列強が制覇を競い出した新しい国際環境の中で、幕府から「世界ならびにカラフトを含む実測日本地図」の早期作成を命じられ、一八〇九（文化六）年から翌年にかけての新編総界全図・日本辺界略図作成を皮切りに、北夷考証を著すなど、当時、不明確であったカラフトをはじめとする北辺の全容を精力的に解明すべく、学者として心血を注いだ。

同じ時期、カラフトを探查中であった林蔵から届く報告のうち、特にカラフトの略図は景保にとって、何ものにも代えがたい垂涎（すいぜん）的であったし、天文方として、測量御用（地図作り）に関するかぎり、林蔵を区処する権限をもっており、その部下から得たデータを活用して作った地図を幕府に提出することに特に問題はなかったといえる。景保は林蔵が直接見分しなかったもので、実線で描く自信のなかったカラフト東北部の海岸線および北端の地形をもっと正確に知りたかった。学者の良心・功名心、名誉欲を満足さすうえからも、そのことが一番気にかかっていた。

そこに後年の最大の落とし穴が待ちうけていたし、林蔵の決死行による成果を、まるで、景保が私欲を満たすために悪用したかのようにいわれているのも、景保側にあった不用意さのなせるわざであろう。

特に、シーボルトが江戸に参府した時（一八二六年）、景保は、すでに次々と作成され、保管されていた幕府紅葉山文庫所蔵の「各種地図」「報告書（著作）類」を所管する部門で、最高の権限を有する立場にあった。

景保はさらに幕命をうけ、満州語の解明と辞書作りに励み、満語学者としても最高レベルにあった。こうしたことから考えると、景保とは、自己顕示欲の強い、だが、当代一流の学者であった、と理解せざるを得ない。

では、最後に、シーボルトにもひとこと言及しよう。彼はドイツ人で、二十七歳の若さにもかかわらず、オランダ国王、蘭印政庁総督から特命と資金援助をうけて長崎・出島に來日したオランダ商館付軍医（外科少佐）で、博物学者でもあった。したがって、医学（人体）・動物学・植物学・鉱物学すべてに通じた、自然科学分野の万能学者であった。当時、進歩の途次にあった博物学を、何でも調べてやるう、とする観点から「探検博物学」と称する学者もいるほどである。

最近では、シーボルトの來日の真の目的は①博物学的調査②貿易的調査③政治軍事的調査の三つであったと断定する研究者もいるが、一方、それを裏付ける資料がオランダの公文書館や図書館などから続々発見されている。

したがって、長崎郊外に開設を許可された鳴滝塾で蘭学・医学を学ぶため、全国から馳せ参じた若くて有能な日本人弟子たちに、彼は次々とテーマを与えて論文を書かせるなどし、日本のあらゆる分野の資料収集を計画的かつ秘密裏に、しかも用意周到に行っている。北方地図を含む日本全図をはじめ、数々の禁制品はどちらかといえば、政治・軍事目的から強行収集されたとみる方がわかりやすい。

こうした西欧優先ともいえる国家目的があったればこそ、わずか四

十日足らずの江戸滞在中に、あのあつと驚くような数々の放れ業を演ずることができたのだと思う。

以上、日本側の事件に関与・関連した人物同士の「つながり」方には偶然性が多いが、シーボルトの側からすると、目的達成上近づく必要のある人物たちの人脈・仕事内容・長短・弱点などを調べあげ、高橋長崎奉行を起点に、資料収集のネットワークを日本中に張り巡らせていった、その計画性をみる限り、結果として、すべてに必然性をもたせていた、といえそうな気がする。偶然を必然に転換させていくこの超能力ぶり——。ここに、シーボルトの真骨頂があったのではないだろうか。

結論的にまとめると、シーボルトが北辺の地図に特別強い関心をもち、江戸、長崎で大きな成果をあげ得たことの裏返しとして、景保、徳内、林蔵、村垣、高橋（重賢）の五人もすべて「北辺と江戸」でつながっていた。特に重賢は長崎でシーボルトと深くかわっていたし、林蔵も事件の最終段階で長崎へ隠密御用している。

これら六人の相関性の強さの度合いを十点満点で採点してみると、シーボルトが八点、景保は六点、徳内も六点、林蔵は十点、村垣・重賢はともに七点という結果が出た。職制上では一番身分の低かった林蔵が、五人のどの人物ともかわり合いがあったことになる。

だからといって、シーボルト事件は林蔵の裏面工作によって仕組みられ、林蔵の暴露行為によって発覚した、などと考えるのは、筋違いであり、誤りである。疑わしいだけで罰してはいけない。以下、順次説き明かしてみよう。

(2) 最上徳内からシーボルトに贈られたカラフト地図

「黒龍江中之洲并天度」の推理

林蔵が直接描いた地図で現存しているものはカラフト関係図五種、蝦夷全図一葉、千島図一葉、瀬戸内・九州沿岸図三冊（海瀬舟行図）である。カラフト図のうち、一八〇八（文化五）年、第一回探検帰着後、松前奉行に提出した「カラフト島大概図」（函館図書館蔵）、前図と第二回探検の越年中（同年十一月）、トンナイより高橋景保に送った書付の付図とを合わせて景保が作成した「北夷考証」所収の「間宮生夷験図」、「北夷分界余話」の付図（国立公文書館所蔵）、「北蝦夷島地図（七部）」（国立公文書館所蔵）、前図付属の里程記の付図（写本）「間宮林蔵満江分図書」（北海道庁所蔵）はこれまでも、その存在が明らかにされてきた。また「シーボルト所持品之内より取上候」との付箋付きの「カラフト全図」（小図・国立公文書館所蔵）も、林蔵の作図と考えている研究者が多く、一般にもよく知られている。

これ以外、オリジナルなカラフト図はないとされていたところ、一九八八（昭和六十三）年三月、林蔵直筆のカラフト全図が突如、オランダ・ライデン大学図書館から百六十年ぶりに、日本に里帰りし、学界をあつといわせた。

地図の表紙には「黒龍江中之洲并天度」と白虹斎（最上徳内のペンネーム）の名が記されている。いうまでもなく、シーボルト・コレクションの中の逸品で、当時は禁制品であった。地図の大きさは長さ七二センチ、幅三一・五センチで、左上隅には「間宮氏之所筆」と、徳内の保証書きがあり、さらに「尤精好可称矣 最上徳内」と徳内の筆跡で書かれている。

以上のことから、これまで知られなかった林蔵直筆のカラフト図が林蔵から徳内へ、徳内からシーボルトの手を経、幕府の追及を逃れてオランダまで送り届けられ、今日まで保管されてきたことがわかる。では、いつ林蔵から徳内へ、いつ徳内からシーボルトへ渡ったのだら

うか。

北方研究家の谷沢尚一氏は「間宮の直筆だろう。作図の時期は、林蔵が第二回の探検から（松前に）帰着した直後の一八〇九（文化六年十二月から翌年六月までにかけてではないか」と解説している（昭和六十三年三月二十八日付朝日新聞）。一方、秦新二氏は前後の経緯から総合して、作図の時期を、文化六年十二月と解し、著書に明記している。

そこで、私も私なりに、文化六年十一月頃から一年間、林蔵が松前で、どのように報告書を作成し、その前後のいつ頃、徳内とも接触していたのか——推理してみることにした。

林蔵が第二回探検を終え、宗谷に帰り着いたのは文化六年九月二十八日。その二カ月後の十一月二十七日、松前に戻っている。宗谷では身体を休めながら、野帳など測量メモや諸々のデータを整理するくらいが関の山で、報告書は松前で、師匠・村上島之允の嗣子・貞助の協力を得て仕上げるようになっていた。

本来なら、一刻も早く松前奉行に帰着のあいさつをするべきところだが、林蔵は考えがあつたのか、陸路、松前へ西海岸を下した（「北夷談」）。当然、松前の手前・江差を通過する。そこには、前年八月以降、大先輩の最上徳内が詰めている番所があつた。

林蔵は第二回目の探検で、カラフトが島であることを、ナニオーまで北上し、その眼で確認したし、続いて大陸に渡り、黒竜江をデレンまで遡り、清国の高級官吏とも面談し、名刺や証拠の品々をもらって持ち帰った。そうしたことを徳内に詳しく話したいと思い、多分、林蔵は徳内のもとに二、三日逗留し、口頭で報告かたがた、地図をはじめとする正規の報告書作りについて、種々教えを乞うたものと思われる。すでに往年、カラフト図を作成すみの徳内は林蔵の野帳を見、カ

ラフト北部や大陸渡海の話聞き、示唆に富む助言をしながら、北方の話に花を咲かせたに違いない。

林蔵の方も自信がつき、大図を作る前に、カラフト全図（小図）を作ることを徳内に約束し、取りあえず松前に戻った。そして、野帳や諸データを村上貞助に渡し、報告内容を検討してもらっている間に、五十⁺以上の江差との間を往復し、徳内の指導をうけながら、小図を二枚作り、その一枚を十二月も年末に近い頃、徳内に贈ったのではないだろうか。年明けからは、貞助との大作業が待っている。その前に、大先輩の徳内への恩返しをすませ、林蔵も一つ肩の荷を下したに違いない。

翌文化七年一月、林蔵は貞助とともに、カラフト探検の報告書の作成に取りかかった。

まず、地誌「北夷分界余話」（一八五五・安政二年、北蝦夷図説の名で刊行）の編さんから始めた。次いで、探検記「東韃地方紀行」を編さんした。これらは、貞助が林蔵の口述をもとに文章化する一方、カラーの挿絵を両書で計百余枚も挿入し、誰も見ぬ極北の地理を理解し易いようにした。そして両書と並行して、七部に及ぶ「北蝦夷島地図」と「付・里程記」を完成させた。地図は凍傷にかかり手が不自由だったにもかかわらず、潭身の力を出して、林蔵自ら絵筆を取った。

両書は原本兼草稿として同年七月に完成した。地図も同じ七月と記されているが、これは原本一部しかなく、翌年、献上されたまま、林蔵の手もとには残されなかった。しかし、書物（報告書）の方は翌文化八年一月から二カ月間かけ、江戸で一部添削されたものを、改めて清書し、日付を文化八年三月として、正式に報告された。

したがって、両書の草稿は原本として林蔵が大切に保管していた。しかし現在、東京・間宮家にあるのは「東韃紀行」のみで、「北夷分界

余話」の方は行方がわからないままである。

その後、山内家文書として、高知県立図書館が保管している「北夷分界余話草稿」なるものの存在が明らかにされたが、多分、これは草稿の写本と思われ、原本兼草稿は一八五五年、刊本にする際、間宮家から借用したまま、版元で行方不明になったものとおもわれる。もし、この推理が正しければ、「北夷分界余話」の原本兼草稿は刊本「北夷夷図説」と内容的にはほぼ同一とみてよいのではないかと思う。

これら、林蔵のカラフト探検報告書の三部作は幕府の紅葉山文庫の奥深くに保管され、シーボルトの来日等待つ形となる。

一方、徳内の手に渡った「黒龍江中之洲并天度」なる「カラフト図」は徳内が一八二六（文政九）年四月十六日から二十一日までの六日間、江戸日本橋の長崎屋を訪れ、シーボルトと連日会談をした際に現物を見せ、江戸参府の帰途、五月二十一日、見送って行つた小田原の宿で、「提供する代わりに、徳内の功績を欧州の学界に紹介する」約束を取り付け、「二十五年間は公表しない」との了解のもとに他の地図類ともども、シーボルトに渡したもので、この地図について徳内は最後の最後まで慎重であった。シーボルトはこの約束を守り、一八五一（嘉永四）年まで、徳内死後も公表しなかった。徳内が明らかに「カラフト図」とわかるこの地図に「黒龍江中之洲并天度」という、一見不明瞭な題名を付けたのも、国禁を犯したことが露顕することを極力恐れたからで、名実のうち、名の方をとった老学者・徳内の心情がわかるというもの。

(3) シーボルトと間宮林蔵は会っていた

——「手紙」のナゾと「江戸参府紀行」の解釈

一般に、事件発覚の端緒になったとされ、唯一の物的証拠のように

みなされてきた、シーボルトから林蔵に宛てた「手紙」（一八二八・文政十一年二月二十五日付）がオランダ・ハーグ国立公文館で発見され、秦新二氏の著書に掲載された。その日本語文（蘭文は写真参照）とコメントは次の通りである。

「拝啓 江戸滞在中はたつた一度しかあなたと親交を深めあう幸運に恵まれず、また後になつてあなたの業績を数多く耳にし、たいへん残念に思っております。そこで今、ささやかな敬意の証をお送りしないではおられず、ここに贈り物として、花柄入りの布を同封させていただきます。私が無事オランダに戻ったときには、諸外国の貴重な地図をお送りいたします。

敬具

フォン・シーボルト博士
蝦夷より持ち帰られた植物を乾燥させました折には、お送りいただけるとたいへん光栄です」



間宮林蔵宛のシーボルト書状

（縦 22.5 cm 横 18.7 cm）

ハーグ国立文書館

冒頭の一節は林蔵とシーボルトが江戸で会っていたことを証明する唯一の手がかりである。この点については呉秀三氏ですら、会ってもしない人間に手紙を書くのは不自然だと指摘しておられた。まったくそのとおりで、私はこれまで述べてきたように、一八二六年、江戸参府でシーボルトが江戸に滞在した折、二人は長崎屋で会っていたと考える。

以上のように、シーボルト研究の権威者・呉秀三氏でさえ、二人の面談については確認できないまま、推論するしかなかった。だが、手紙には「一回だけ会ったこと」を明確に認めた^{した}。「会った」とある以上、それがいつ、どのような状況下でどのように行われたのか、明確にできるに越したことはない。

「ヨーロッパに眠る日本の宝」展カタログのシーボルト関係年表によると、江戸参府が行われた一八二六（文政九）年四月十七日の項に「江戸滞在、最上徳内と間宮林蔵が来訪。夜、桂川甫賢、大槻玄沢が来訪」とある。二人の来訪は新事実というので、傍線が引いてある。これまでの東洋文庫（平凡社刊）の「江戸参府紀行」では、夜の医師二人の訪問のことしか記されていない。林蔵については紀行中のどこにも、何も記されていない。シーボルトが書き忘れたとは思えない。秘密扱いして、あえて書かなかったか、それともあとから削除したか、のどちらからであろう。

しかし、前日の四月十六日の項では、最上徳内の来訪について千言万話を費し、しかも万が一、読まれてもわからぬようにと、大事なことはラテン語で書いている。その最初の方に「最上徳内という名の日本人が二日間にわたって訪れた」という文章がある。徳内は十六日から二十一日まで六日間、連日のようにシーボルトを訪れたとされているが、十六日が最初の訪問日なら、この「二日間」は十五、十六の

両日ではなく、十六、十七の両日とみななければならない。とすれば、シーボルトはラテン語であろうと、十七日の徳内の来訪のことは記録したつもりでいたと解する方が理に合っている。一日ずらしてしまっただか、あるいは、多忙の折は、あとから、まとめ書きしたのだろうか。それとも、「日本」の第二版で、この参府紀行を発表（一八九七年）する際、息子のアレクサンダーらが、シーボルトの書き上げていた原稿にさらに手を入れた（東洋文庫「江戸参府紀行」解説）のだろうか。

いずれにせよ、新事実としての十七日、林蔵が徳内に伴われてシーボルトを訪れ、何を話し合ったのかは見当がつかない。だが、「手紙」から推測する限り、「後になってあなたの業績を数多く耳にし、たいへん残念」とわざわざ書き送っていることは、徳内との話に忙殺され、林蔵の北辺での活躍や著作については、そう具体的に話し合わなかったものと解される。これまでよく紹介されてきた「林蔵をことのほか誉めあげ、今後、懇親を結びたい」との文面——というのとも、大分ニュアンスが違う。

林蔵は徳内の好意的すすめにより同行したまでで、「密会・密談」の事実があれば、「手紙」のような文章にはならなかったと思う。また林蔵が幕命により、シーボルトの身边を探っていたとするなら、「手紙」と贈られた「更紗一反」を開封せずに奉行のもとへ差し出す必要はない。特命を受けている以上、調査権があるわけだし、「誰がいつ届けたのか」と、仲介した高橋景保に直接聞くこともできたはずだ。中身を確認もせず奉行所へ、という法的手続きは「普通の立場の人」にとつて必要な手続きであって、特命をうけていた隠密の行動としてはもうひとつ解せない。しかも、手紙が届いたのは四月十七日。あと五カ月でシーボルトは帰国する。禁制の品々の持ち出しの件が問題視されて

いたのなら、とくに、具体的な何かがわかっていたはず。むしろ、林蔵のその行動から推察すると、「シーボルトの身辺を嗅ぎ回っていた」などというのは、考え過ぎではないかと思う。

また、もし、届け出が隠密としての必要な行動なら、敵に手の内を見せるような「警告」が後日、行われているのも不思議である。目的が別にあるのなら話は別だが……。

こうした点に関し、「江戸参府紀行」の序文の中に、次の通りの「シーボルトの記述」がある。

「一八二六年に予定されている江戸旅行は、自然科学ならびに地理学・民族学に関し、興味ある成果をあげるものと期待された」

「使節派遣終了後もしばらく、国費で江戸に滞在し、將軍の医師に植物学や医学を教えることを口実に、日本国内を旅行しようという計画を立てていた。(略)私からこの計画の知らせを受けた蘭印政庁はこれに同意し、私の特別な研究対象となるものを詳しく指示した命令を私によこしたばかりでなく(略)この計画ならびに私の学問的企画一般に対し、公使(商館長)の権限をもって強力に私を支援するよう、特に依頼してきた」

この学問的調査とは別の「この計画すなわち特別な研究(調査)対象」が具体的には何を意味するのか、秦氏の指摘を待つまでもなく、この言葉から、ただごとでない何か匂ってくる。シーボルト事件の根源と本質はこの辺にあるのでは……といって過言ではないのかもしれない。

続く

(参考文献は次号にてお知らせします)

(おおたに つねひこ)

毎日新聞社終身名誉職員、間宮林蔵顕彰会顧問)

近刊紹介



国禁の伊能図はこの長崎屋にも隠されていた？
この秋雄松堂出版から刊行された

長崎屋は江戸日本橋にあった幕府御用達の葉種問屋。舶来葉種を販売する傍ら、オランダ商館長(カピタン)が江戸参府する際の定宿となっていた。高橋景保ら多くの学者や文化人が交流を求めて訪れた。

鎖国下の江戸の異文化交流、その実態を長崎屋に見る
阿蘭陀宿長崎屋の史料研究
片桐一男 著
長崎 2007年10月10日発行
320頁 1500円



忠敬先生関連の或る古書をめぐって (二)

秋間 実

3

わが忠敬先生については、著者にその顕彰にかんして鈴木雅之についてほど切迫した思いはなく、いわば静かなしかし熱い敬慕の念にだけは満たされています。やっといま、本書の前半「伊能忠敬」だけを手に取ってその中身を問題にする、最後の段階へやってきました。四点に分けて述べよう、と思います。

(1) 意義

「鈴木雅之」を併せた本書全体の「序」を、伊藤は、つぎのように始めます――

「伊能忠敬は徳川時代に於ける有名な人物であった。彼が日本図の作製のために約二十年のながきにわたって老軀よく測量の旅をつづけ、これに心血をそそいだことは、「人」のよく知るところである。彼の功業と彼のひたむきな精進との前に私は頭をたれる。私は若くして大谷亮吉の名著『伊能忠敬』『岩波書店、一九一七年』を愛読した。のち長じて忠敬の測量日誌の一部を熟読する機会を得た。そしてますますこの老学徒の精神力にうたれるに至った。そして私は「本書の前半で」愛敬のこころを以て彼の最初の測量行を描かうとした」と。

続けてこう書いています――

「思へば、『』天明から寛政・享和・文化及び文政の間は日本にと

って誇るにたるべき科学者達の輩出した時代であった。忠敬の周囲だけでも麻田剛立・高橋至時・間重富及び高橋景保と数へることができる。それは日本の科学のはなばなしい出発でもあった。私はその忠敬の周囲を描かうとした。……」(二二ページ)「傍点、秋間」と。

さらにこう続けています――

「しかし、この一篇は忠敬の『伝記』といったものを書かうとしたのではない。また忠敬の仕事の『研究』をめざしたのでもない。それにはほかに適当な人がある筈である。私はこの一篇ではこの時代の日本の科学の雰囲気とでも名づくべきものを出さうとした『のである』。……」(二二ページ)「傍点、秋間」と。

ここで語っているのは、前節で『日本科学史』を書いて世に送ったと推定された、日本自然科学史の研究者としての伊藤至郎です。その言明は、「周囲」とか「雰囲気」とかといった表現を使っている、一見すると、焦点の定まらない遠慮した目標しか掲げていないかのようですが、じつは、忠敬先生の活動を当時の政治・経済・文化・自然科学といった諸要因の複雑なからみあいの全体のなかで具体的に生きいきととらえよう、と語っているものであって、かえって歴史の研究また叙述の大道をさし示しているものにほかならないのです。

このように自然科学史的に適切な伊能忠敬像を描き出そうと目ざしている点に、この小品のすぐれた特色と意義とがある、とわたしは考えます。

(2) 構成

忠敬先生に献げられているのは、一八三ページ(本文一七五ページ、年譜八ページ)です。本文は、「その一」から「その三十六」まで全部

で三六小節でできていて、大まかに言つて、つぎの三部に分けられるかと思いますが――

一 忠敬先生が高橋至時の門に入つた寛政七「一七九五」年のころまでの、日本の天文・暦学界の陣容（「その一」――「その四」と、先生のそれまでの経歴・生きかたおよび猛勉強ぶりとの紹介（「その五」――「その八」）。三ページから三二ページまで、小計二九ページ。

二 徳川幕府の執行部を口説いて、ともかくも幕府の事業として忠敬先生に蝦夷地測量を行なわせるといふ決断をくださせるまでの、当事者たちの奔走の描写（「その九」――「その十五」）。三二ページから七三ページまで、小計四一ページ。

三 江戸を出立してから帰府するまでの一八〇日に及ぶ蝦夷地測量行、ならびに、地図の作製および呈上、という大事業の詳しい追跡（「その十六」――「その三十六」）。七三ページから一七五ページまで、小計一〇三ページ。

「測量日誌」からの引用を含むので最大の分量を占めるのは当然ですが、そのなかで、いわば中括として、「その十九」（八七―八九ページ）において、こんどの測量行のいわば全体像――高橋至時・忠敬先生たちが、緯度一度の長さの正確な実測などみずからの天文学上・地理学上の切実な関心を、幕府のおもに国防上の関心とうまく結びつけた、というものを――を手際よくまとめてあるのも、目を惹きます。

(3) 文体

このような構成をもった本文は、では、どのような書き進められかたをしているのでしょうか？ これを示すために、本文のはじめ（a）と終わり（b）とを写しておきましょう（旧かなづかいのまま、以下同じ）――

a 「剛立麻田愛彰が杵築藩を脱走して大阪にでたのは明和六年

（一七六九年）、彼が三十六歳のことであった。大阪は愛彰がはじめて踏む土地ではない。藩候松平親榮の侍医となつてから三年の間に幾度か親榮に侍して江戸へも大阪へも行つてゐる。そして当時の大阪が彼の目ざす天文・暦学の研究には便宜の多い土地であることをすでに知つてゐた。大阪に出て研究のかたはら医者としても立つた。生活のためである。脱走者であつては郷里の近親の人達も公然とこれを援助してやることもできなかったであらう」。

b 「私は忠敬が上呈の地図につけて出した説明の文の大部分を抄した。この懇切な一々の説明は地図がいかにしてつくられるかを知らぬ幕吏達をも納得せしめたものであらう。……その説明は幕吏たちのためであつたことは勿論だが、またそれは地図そのものための説明でもある。言葉を換へて云ふなら「忠敬たちは正面から日本の地形と取組んでゐるので幕吏たちと取組んでゐるのではない。世界の学者達さへもひとしく認めずにはゐられない地理学上の仕事をしてゐるのだといふ彼のほこりを私はこの平静な説明の中にもみる」。

「忠敬はこの年五十六歳であつた。さうして老いて倦むことを知らぬ彼のこころは「遠く「今回は測量できなかった」蝦夷地の西北岸を辿つてゐた」。（昭和一六「一九四一」・六・二七夜）

このようにただ始めと終わりとを引用してお目にかけるだけでは説得力に欠けるかもしれませんが、伊藤至郎の行文は、全体をつうじて、少なくともわたしには、冷静また平明で読みやすくわかりやすく思われます。これはうれしいことです。

ただし、数多く引用されている候文は、――「候得共」という当て

字には虫酸^{むしす}が走るのはさておいても、——わたしには大の苦手^{にがて}です。

ただ古文書がまったく読めないだけではなく、すでに解読され活字を使って印刷されているテキストさえ、たいへん読みにくいのです。たとえば、「貴君も先々ご存心に行兼候とも約成被置可然哉。御役に御成被成候故に別而後世を耻被成候得共無是非時勢と思召被成程能被成度泰存候。」(四三ページ)のような字列がそうです。とてもすらすらとは(いや、「すらすら」とではなくても)読みくだせず、大意を推察するのには精いっぱいです。頼みの至郎先生も、あまり親切ではありません。なかなか読みくだしてくれないのです。他方、たとえば五九ページから六二ページにかけてでは、読みくだしたうえに現代口語訳までしてくれていて、たいへん助かります(10)。読むのに難儀するのは、なにも候文(つまり、手紙)だけではありません。忠敬先生が間宮林蔵に与えた「贈間宮倫宗序」にしろしたつぎの字列も、やはりそうです、——「今茲辛未之冬 将発、就餘間測蝦夷地之術。先是、寛政庚申之歲、余亦稟命測蝦夷地、中路与倫宗相見。自足相親如師父」(一三四ページ)。わたしのこの程度の日本語力、お笑いください。

(10) ふだん会報上では安藤由紀子さん・伊藤栄子さんがしてくださっています。

といったようなぐあいでは、この小品をきちんと正確に読みこなせたと考えられませんが、それでも、わたしなりに感銘を受けたり興味ぶかく受けとめたりもつと深くまたはその先を知りたいと思ったりした箇所などが、いくつかはあります。そこで、以下、最後にそれをして、しろうとの感想・意見・疑問・要望などとして賢明な会員諸兄姉のご参考に供し、容赦のないご批判を乞い、適切なご教示を頂戴

したい、とねがいます。

(4) 話題

まず、高橋至時と忠敬先生とのあいだの心のかよいあった師弟の關係には、いつも感動させられます。著者のことばを書きとめておきます——

「忠敬が高橋至時の門に入つたのは寛政七年(一七九五年)である。……この年五十一歳である。さうして自分より十九歳も若い至時のもとに通ふ彼の老書生としての生活がここに開始された。

「忠敬は至時に心服してゐた。この若き師にうけた恩恵を彼は終生忘れなかつた。至時は文化元年(一八〇四年)に四十一歳の壮齢で病歿した。忠敬はこの師の死後十四年、文政元年(一八一八年)に七十四歳で死んだ。遺言によつて彼の墓は浅草源空寺の至時の墓の側につくられた」(その四の冒頭部分、一二／一三ページ)。

つぎに、間重富と高橋至時という麻田妥彰の二高弟のあいだに取り交わされた手紙が手写されて『星学手簡』として残っているそうで、伊藤は、「これを読むと「八歳ちがいの」二人の友情の深かつたことや学問に対する熱心さやそれから周囲の人達に対する彼等二人の心遣ひ等を知ることができる」(三三／三三ページ)、と書いています。そのなかには、忠敬先生の天文・暦学勉強の進歩や天体観測の腕前の向上や蝦夷地測量行の成果などについて厳しくしかし温かく評価している箇所もあるようで(三三ページ、三八／三九ページ、一六八／一六九ページ)、興味を惹かれます。もつとあるのでしうか? そもそも『星学手簡』は、識者にはよく知られた文献なのでしうか? また、現

在、広く流布していて気がるに買って読むことができるものなのではないか？

つづいて、忠敬先生が、測量行の帰路、寛政十二「一八〇〇」年九月に、三橋藤右衛門という役人（勘定吟味役とかで、蝦夷地御用の職にあった）に依頼されて、参考文献も資料もないままに、天文・暦学の日本への伝来の歴史をものし、この「書付」をのちに師・至時に懇請して江戸で「筆削損益」してもらった、という一部始終が、印象的でした。忠敬先生がまとめた分は、全文、一四八ページから一五〇ページにかけて掲げられていますし、至時がこれを加削した「天文来歴の書付」は、一五九ページから一六五ページにかけて、これを見ることができます。この二篇は、当時の日本人専門家たちが世界の天文学の歴史と現状とをどのようにおさえていたかを示す、貴重な資料でしょう。二篇のできばえには、当然ながら、格段の差があるようです。

現代の日本科学史（天文学史）専門家たちが至時の「書付」を立ち入って検討したというようなことは、これまでにあったのでしょうか？
ところで、これだけの大仕事をこの師弟にさせた三橋藤右衛門とは、そもそもなに者だったのでしょうか？そして、なんのために、あるいは、だれのために、そこまで身を入れたのでしょうか？このことは、忠敬先生研究者にはとうによく知られている事柄なのではないでしょうか？

人物にかかわる事柄としては、伊藤は、さらに、大川治兵衛と小川治兵衛とが同一人物かどうか決まかねていますが（九五ページと一五五ページとで、こんなことはもうとつくに解決済みなのではないでしょうか？）最後に、伊藤とともにわたしにも、忠敬先生が五四歳のとき「客分」として自宅に迎え入れた第三の（内縁の）妻である栄のことが、気にかかります。それは、至時が寛政十二年の末に重富に書いた手紙のな

かで、忠敬先生たちとともに蝦夷地の地図の作製にあたっているこの女性のはたらきぶりなどを観察して「才女」と激賞している（その十一「冒頭、四五ページ」）のに、その姓氏・年齢さえ不明のうえ忠敬先生と結ばれることになった機縁などもまったく知られていない、のだからです。現在ではこの事態は改善されているのでしょうか？

じつは、このほかにも、たとえば、五六歳の忠敬先生が幕府との折衝中に年齢を問われて、たぶん「高齢ゆえに蝦夷地測量という大事業は体力的に無理」と判定されまいためにしよう、「申五十一歳」と五年も鯖（さば）を読んで（五三ページ）ことがおかしかったり、至時が忠敬先生宅を訪れたあとで「誠に此間は種々御馳走罷成忝奉存候」と手紙のなかでお礼を述べている（六八ページ。これは読めました）のが人間的でほほえましく思えたりした、という楽しいこともありましたが、以上をもってわたしの幼稚な（読書ノート）を閉じることにします。

× × ×

貴重な紙面を割いて小稿を載せてくださるという編集部の好意に、また、忍耐よくここまでつきあってくださった読者諸兄姉のご厚意に、心から感謝申しあげます。

（二〇〇七年五月十五日）

（追記）

このところずっと、著者・伊藤至郎のせめて生没年くらいは知りたかったものだ、と思いつづけてきました。下書きが終わるころ、藁をもつかむ気持ちで、伊藤に縁が深い千葉県一宮町——いちのみやまちこの自治体がまだ存続しているらしいことに古い郵便番号簿（一九九七年版）で目

を着けて——の戸籍課に往復はがきで問い合わせてみました。すると、折り返し住民課の高師さんというかたから回答が届きました。いわく、住民課では確認できないのでインターネットで検索したところ、「千葉県成田市ゆかりの人物」として、「一八九九（明治三二）年十一月三日生、一九五五（昭和三〇）年十月十七日没。評論家。」と出ています。と。「成田市ゆかり」は正しくなく、「評論家」も適切でなく「著述家」のほうがよかったです。それがともかく、生没年月日が——正確であるとして——判明したのは、予想を超えた大きな収穫でした。高師さんのお力づくしをたいへんありがたうれしく思いました。ただし、この段階で本文の関連箇所をこれに見合せて書き直すことはしない、ことに決めました。

伊藤は、五六年たらずの一生で、けっして長生きしたとは言えないでしょうが、敗戦後ともかくも一〇年は生きたわけですから、本文で引いたように「戦後間もなく死んだ」とも言えないようです。そして、一九四八年六月四日付のあの「あとがき」が絶筆となることもなかったことが、まもなく確認できました——

「是非インターネットで検索をしてみてください」という高師さんのご助言に従って、娘むこにその労をとってもらったところ、伊藤至郎にかんして、右の表示はもちろん、著書を中心に大量の情報が集められているのには、まったくの驚き、びっくりしました。とりわけ、『日本科学史』がちゃんと一九四一年に伊藤書店から出版されていたことが確認できたほか、あの『対応の学としての数学』以後に、『数学概論』（一九五一年）・『科学への歩み——科学入門』（一九五二年）が刊行されていることもわかって、その健筆ぶりにほっとするものを覚えたのです。

インターネットばんざい！ が、老残のわたしにとつてはむずかしい時代になりました。

（二〇〇七年五月二十五日）

了

（あきまみのる・

東京都立大学名誉教授、哲学・自然科学思想史）

（補遺——訂正を含む）

その後、六月十七日までに、インターネットをつうじて、伊藤至郎の著書を四冊、手に入れることができました。

刊行順に挙げますと——

- 1 『日本科学史』（B6判三二〇ページ）
伊藤書店、一九四一年七月十二日刊
 - 2 『鷗外論稿』（B6判三八八ページ）
光書房、一九四一年十月二十五日刊
 - 3 『通路——或る数学者のノート——』（B6判二六九ページ）
月曜書房、一九四八年六月十五日刊
 - 4 『自然弁証法への入門』（A5判二八五ページ）
古明地書店、一九五〇年十月二十日刊
- 以上です*。

* 『数学概論』（一九五一年）・『科学への歩み——科学入門——』（一九五二年）は、まだ入手できていません。

ご覧のとおり、前二者は、『伊能忠敬・鈴木雅之』（一九四一年九月十五日刊）と同じく、真珠湾攻撃のすこし前に刊行されています。そして、後二者は、敗戦後に出版ものです。

待望の『日本科学史』は、第一章「推古朝以前」から第九章「徳川

時代の科学」第七節「シーボルトの周囲―教育」にいたるまで、小冊ながら周密な調査・考証を重ねた力作で、みごとな日本最初の通史(明治以前の自然科学の)になっている、と言ってよさそうです。

忠敬先生については、至時・重富らを育成した麻田安彰からシーボルト事件で獄死した景保まで(二七二ページから二七七ページまで)、さらには「伊能忠敬に自製の望遠鏡を提供した岩橋善兵衛のこと」(二七九ページ)まで、一〇ページ近い記述のなかで、直接的には二七六/二七七ページで光を当てています。

「序」の日付は「昭和十六(一九四一)年五月十四日」になっている、この文章はたぶん、かれが予審終結の決定(同四月二十二日)→保釈によって一宮町の自宅にもどってからまもなく、まっさきに書いたものの一つでしょう。ただし、ここでは、この本の「遍歴」については、

――つまり、第四次唯物論全書と見なされてよい三笠全書第一期刊行予定分に入れられていた『日本科学史』が、一九三八年四月から三九年二月までに実際に刊行された一六冊のなかにははいらなかったのはなぜか、かれの逮捕がこれに影響を与えたのか(たとえば三笠書房の自己規制といったことを引き起こしたのか)どうか、いま自分が別の出版社から上梓しようとしている『日本科学史』が、あの幻の『日本科学史』と内容上まったく同じものであるのかどうか、といった事柄については、――なにも語っていません。

つぎの『鷗外論稿』は、I「鷗外論稿」・II「若き日の鷗外」・III「鷗外研究」という三部で構成された大冊です。予想に反して、全体をたいへんおもしろく一気に通読することができました。伊藤には、この巨人の生涯作品についてのなが年(ねん)にわたる取り組みがあったようで、かれは、昭和十六(一九四一)年九月二十八日に書いた「あとがき」のなかで、「ひたすらなる敬愛のおもひを以てこれ『この本』を書い

た」と言うのと併せて、全巻の過半(二三四ページ)を占めるI「鷗外論稿」について、「これ」はかつて雑誌「文学」に発表せるものを今夏に至って全面的に思ひきった筆削と附加とをなせるものである。旧稿に比してやや内容に重厚味を加へ得たものとひそかに考へてゐる」(傍点、秋間)、とも書いて、愛着と自信とを示しています。わたしにはここで、第一審判決を待ち受けながらもかくも自宅で平穩のうちにすごした夏の日々に、この仕事に少なからぬ努力を注ぐことができた、とかれが語っているのが、印象的です。ひよつとすると、春から秋にかけてのあの日々に行なったうちでいちばん力はいった大仕事であったのかもしれない。

他方、敗戦後に刊行された二冊については、省略します。ただ、『通路』二二〇ページに、わたしが前号四三ページ下段で「戸坂が長野刑務所に下獄しそこで没した」と書いたのは正確でなかったことを教えてくれた記述がありますので、それだけはつぎのとおり引かせていただきます――

「戸坂潤氏は一九四五年八月九日に長野刑務所で死んだ。治安維持法違反の罪名によって起訴され、大審院で懲役三「四?」年の刑が確定し、この前年の夏に下獄して一年、空襲下の東京刑務所にあって栄養失調と不自然な獄中の生活のために、頑健であった体を極度に悪くし、長野へ移されてしばらくして死んだ。哲学者としての優れた天分も十分に発揮することなく殺されたのである」。

最後に、前号で「A5版」・「B6版」と書いたのは、「A5判」・「B6判」の誤記でした。訂正します。(二〇〇七年八月十七日)

和算の人脈 (二)

安藤 由紀子

一 尾形啓次郎（渡辺 慎）と忠敬

伊能忠敬の唯一の後継者

会田算左衛門安明の実子、尾形啓次郎

について、大谷亮吉著『伊能忠敬』の語るところを聞いてみよう。

伊能忠敬が個人で始めた測量の初期には、従事者は縁者たちであり、後に幕府直轄になってからは、幹部として天文方の吏員たちを多く使ったので、終始一貫純然たる門弟として忠敬を支え、没後その学統を継いだのは、この尾形啓次郎ただ一人であった。

天明六（1786）年に生れ、生れて間もなく香取神宮神官、尾形平馬の養子となった。久保木清淵（忠敬の師でもあった）に就いて漢学を、会田算左衛門安明について数学を学び、一六歳で内弟子として忠敬に入門してそのほとんどの測量行に従った。

最後の九州測量のとき、老いた忠敬は、今まで自分専管で人の助けを嫌った夜間の天測をたいへん負担に感じるようになり、啓次郎に分担するように頼んだ。文化一〇年四月、九州から佐原の長女妙薫に宛てた手紙の中で忠敬は、「測量については、尾形が丹精こめてくれていて、特に夜分などは大いに助かっています」と書いている。

啓次郎は文化一二年幕府の普請役渡辺氏の婿養子となったが、武士になったおかげで天文方に向うでき、高橋景保の手付下役という資格で、引き続き地図の完成に力を尽くした。

しかし二年後には不運にも、岳父渡辺氏が長崎の現場で急死し、天文方への出向をやめて、京都の普請現場へ赴任しなければならなくなってしまう。啓次郎は、妙薫に宛てた手紙に、「亀島（忠敬自宅、地図御用所）へ引き続き出勤したいと、いろいろ骨折ってみました、うまいきませんでした。今までの御恩に報いることができず、幾重にも残念です」と書いた。忠敬死去の四ヶ月前のことである。

終りに臨んで忠敬は、自分の測量の術を後世に伝えるために、その概略を書物に書き残すことを啓次郎に命じた。彼は普請役の仕事の余暇を使ってこれをまとめ、七周忌にあたる文政七年に草稿を作った。

題して『伊能

東河先生流量地
伝習録』という。

この自筆の原本
は、

現在行方が分らないが、国会図書館や東北大学など四箇所写本が蔵されている。

その序文によれば、忠敬は次のように命じたという。

「天文曆学にはそれぞれ流派

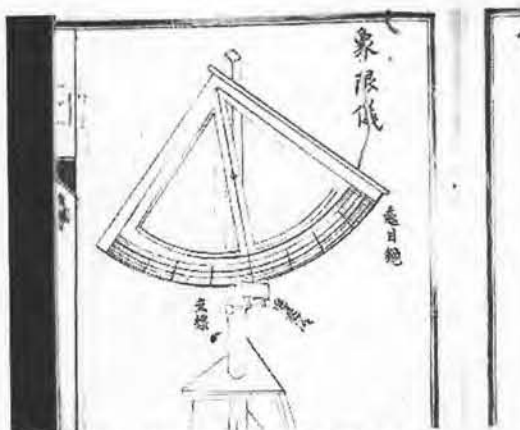


図15. 『伊能東河先生流量地伝習録』、
文政7年（1824）写、象限儀の図

な後継者がいる。しかし地理の術においては、まだいない。もし後世私の術に志す人があれば、詳しく伝えてやってほしい」と。

啓次郎は、「自分はその術を学ぶこと久しいが、愚かにしてその奥義を窮めることができていない。しかしここに七周忌を迎え、先生の意中を思つてひそかに涙を流し（潜然トシテ涕襟ヲ沾シ）、先生終焉の命に背くことはできないと思つた。見聞したことを記録して、その責務をいささかなりとも果たしたい」と続けている。

啓次郎はずっと貧しい普請方として、天領の土木工事を手がけた。忠敬没後は、地震で崩落した宇治橋再築のため京都にいた。ここは物価も高く、権威ある大工頭や大商人たちに頭が上がらなかった。現場の下っ端役人の苦しい事情を妙薫に訴えた手紙があつて、同情をさそう。忠敬が生きていたら何と思うだろうか。

彼は天保七年、『伊能東河先生流量地伝習録』草稿完成の二二年後に、五一歳で没した。

忠敬を支えた技術者は、測量中に殉職して五島の福江島に葬られた天文方の坂部貞兵衛と、この尾形啓次郎の二人につきる。

二 出生のひみつ

実の父

前記『伊能忠敬』によれば、啓次郎の実父が会田安明らしいという大谷亮吉氏の推論の根拠は、二つある。

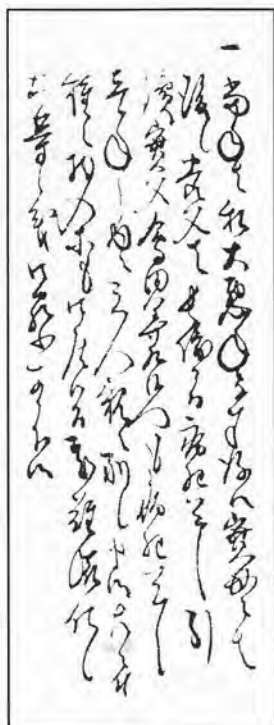
その一つは、啓次郎が、忠敬の長女妙薫に宛てた手紙の存在である。氏は割注で、「実父会田算左衛門云々」と記したのを見たと書いておられる。そしてその実物が、今度整理した「世田谷文書」の中にあつたのである。

〇二三—三 尾形啓次郎書簡

伊能妙薫宛

文化一四年二月五日

（前・後略）



釈文

一、当年は私大悪年と奉存候、実母二は後レ、養父は長崎ニて病死いたし、引続実父会田算左衛門も病死いたし、壺年之内ニ、三人親ニ別レ申候

口語文

本年は私にとって「大悪年」でした。実母を亡くし、養父は長崎で病死いたし、引き続き実父会田算左衛門も病死してしまい、一年のうちに三人の親に死別しました。

そしてもう一つの根拠は、浅草寺の新奥山に今も立っている、会田



安明の「算子塚」である。この「算子塚」はたいへん大きくて堂々たる石碑で、碑文は亀田鵬斎が書き、文政二年の会田安明三周忌に建てられた。地中には、安明が日ごろ使っていた算木が埋められている由である。

会田には一種のカリスマ性があつたように見える。弟子たちは、この時から現代にいたるまで何度も祭祀を行なってきた。一三回忌、三三回忌、五〇年祭、一〇〇年祭、そして昭和四一年に一五〇年祭を行なつて、伝記『会田算左衛門安明』を出版したというから一驚に値する。

下の写真はこの碑の裏面であるが、高第二九名、親族四名の名が刻まれており、その中に渡辺（尾形）啓次郎の名が、嫡男会田安豊の次に読み取れる。啓次郎は、父の三回忌のために、浅草に来ていたのだ。



啓次郎の父が会田安明であるという大谷亮吉氏の推理は、この二つの証拠から正しいことが分かる。

【実の母】

大谷氏の『伊能忠敬』には、「母は大川氏なり」とし、割注に「尾形氏の系譜による」とだけ書かれている。この系譜は見つからなかったが、おそらく神官尾形氏の系譜に大川家から養子に來たことが記載されていたのだろう。この大川氏とはどんな家なのだろうか。いつも気になっていたのだが、世田谷文書にある尾形の六通の書簡を熟読していて、あることに気付いたのである。

彼は妙薫にたいして、度々「津宮」よろしく「手紙を同封するので、ついでのとき津宮に渡してほしい」などと文末に書き、京都へ赴任の前までに伊能家から借りた借金を、津宮へ預けてある米代金から引取ってくれるようにと頼んでいる。この米代金は、地図製作中のお手当であろう。彼が手紙で書いている「津宮」とは、大川治兵衛家のことである。お金を預けるくらいだから、この大川治兵衛家こそ、尾形家の年譜にある「大川氏」なのだと確信した。彼の、実家に対するような、懐かしげな口調も、これなら納得できる。

大川治兵衛

大川治兵衛は、江戸で財をなした津宮村（現香取市）の豪商で、屋号を加納屋といった。忠敬は、七歳年下の彼と組んで江戸に米問屋と酒屋を二軒営み、たいへん繁盛していたらしい。両店とも加納屋という屋号で、経営はそれぞれ忠敬の娘夫婦、伊能盛右衛門・イネ（後の妙薫）と治兵衛の弟かと思われる夫婦、加納屋新兵衛・トシが担当していた。世田谷文書の「受取り類一括一綴」の中に、「叶」という字を図案化した印鑑が使われているものがいくつかある。二店共にその帳簿管理は、大川治兵衛が担当していた。

江戸時代は血族間でもきちんと借用書を書いたものだが、伊能家三代、忠敬・三郎右衛門景敬・三郎右衛門忠誨の間の借用書は、すべてこの人が立会人になっていて、伊能家の家政に大きな発言権を持っていたことが分る。

忠敬は最後の九州測量に出発する前、生きて帰れないかもしれないと思つて遺言のメモを残したが、親族以外では、遺贈金額の筆頭は大川治兵衛で、五〇両になっている。

測量のマネージャー

大川治兵衛は、伊能忠敬を語るとき、忘れてはならない人である。測量のための人集め、給料の契約、持参する品々の調達までのすべてが、彼に任されていた。その様子が分かる手紙を紹介しよう。文化四年六月、秋に出発予定の第六次測量の準備を依頼した忠敬の書簡である。

原本は早稲田大学の所蔵で、『蘭学者書簡集』（影印本）として出版されたもののコピーである。

この手紙の背景には、ロシアの南下による政治情勢の緊迫があった。三カ月前、ロシアのエトロフ島襲撃という流血の惨事がおこり、逃げる一方だった会所の責任者は切腹。幕閣は騒然としていた。東北各藩に出兵命令が下り、天文方直属上司の若年寄堀田攝津守は、異例の蝦夷視察を翌月に控えていた。こうした事情で、忠敬がこの手紙で心配している通り、第六次測量は結局翌年の一月に延びてしまった。

伊能忠敬書簡 大川治兵衛宛

文化四年六月一日

（前・後略）

釈文

上二も御事多二御座候得ハ当秋

出立之儀、如何ニ可有之候哉、殊ニ

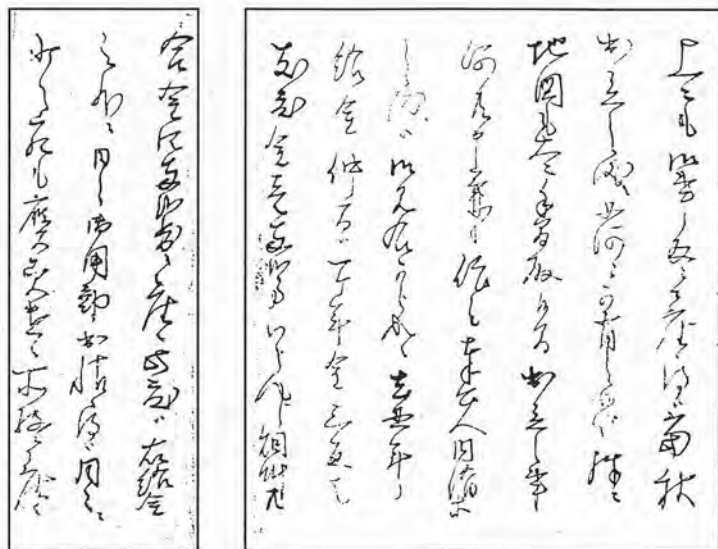
地図も大ニ手間取候間、出立之事

何共申上兼候、依之奉公人内借等

之儀ハ御見合可被成候、去丑年ノ

給金、仲間ハ一ヶ年金三両也、

支度金一兩貳分、わらんじ烟草共



合金四兩式歩二御座候、此度ハ右給金
之外二日々御用勤出精候得ハ、月々二
少々宛も褒美遣候所存二御座候

口語文

(こんな次第で) お上も御用繁多でいらつしやるので、当年秋出立の件もどうなりますことやら。ことに地圖もたいへん手間取っていますから、出立については何とも申上げかねます。従って、奉公人への前貸しなどは見合わせてください。一昨年ちゆうげんの仲間の給金は、年額金三兩、支度金は一兩二分、わらじ・たばこ代合せて四兩二分でした。このたびは右の給金の外に、日々のお勤め次第では、月当りで少々褒美を出そうと思っています。

仲間とは下男のこと、大川治兵衛が地縁によって常陸・房総から集めた。命がけの重労働で給金も安い、たらふく食べられたので、希望者が多かったらしい。

この後に続けて、「もつとも海岸難所もあり、勤まらない者があつたと困るので、心当たりの者があつても、急いでお決めにならず、生れ在所や年頃を前もお知らせください。給料の前貸しは、江戸風にしたいと思います。余分に貸すと、病氣などで行けなくなつたとき、返

金が難しくなります。正直で、年が若く、さかやき月代を剃つたものがよいでしょう。見つかりましたら、お決める前に「一報ください」と注文をつけている。

忠敬は次回測量の件で、天文方や蝦夷事件で大混乱の上層部との交

渉に追われ、おまけに地図製作にも手間取っていたから、準備の細部はすべて、治兵衛任せだったことが分かる。

三 啓次郎を育てた人脈

会田安明の登場

佐原村は房総屈指の商業の町で、前号で見てきた通り、利根川水系を管理するための情報の集散地でもあつた。

忠敬の三代前の享保時代の名主、伊能三郎右衛門景利(義祖父にあたる)の文書にも、川普請のときの幕府官吏たちとの密接な関係を示す史料がたくさんある。彼が管理していた土地は、領主である旗本天方氏の知行地だけでなく、川筋の幕府領も含まれており、幕府勘定方からの褒賞も受けている。

津宮村は佐原の隣り村だが、利根本流に直接面していて、いわばその玄関口であつた。明和六年に江戸に出てから普請役を解雇される天明六年までの一八年間、特に後半に、幕吏会田安明がこの二村の周辺の人であつたことは確かであろう。

尾形啓次郎が生れた天明六年に、会田安明は四〇歳、大川治兵衛は三五歳である。後の世話のし振りから考えて、赤ん坊の母親が治兵衛の血縁の女性であつたことは間違いないのだが、彼の妹であつたか、娘であつたかが分らない。当時の女性の結婚は早かつたから、娘の可能性の方が大きいと思われる。治兵衛が忠敬と同じ一八歳で長女を得たとすれば、この女性はのとき一七歳になる。歳の差がありすぎるが、外に資料がないので、こう推測するしかない。

会田は武士(その頃はまだ鈴木彦助)であり、正妻と嫡男もいた。この時代、こうした運命の赤ん坊は母親の家で育てられた。彼女は治兵衛の家かその周辺で、子育てをしたのだろう。再婚もしなかったよ

うに見える。啓次郎の手紙からは、妹がいたらしい気配も感じられる。

津宮村には、全国レベルで有名な漢学者、久保木清淵がいた。彼は菅茶山の友人で、忠敬の師でもあり、水戸藩のお召しで郷校の教授も勤めた。清淵はまた、香取神宮の神官尾形平馬とは、学僧松永北溟^{ホクメイ}に就いて共に漢学を学んだ幼友達だった。

大川治兵衛は久保木家と隣り組で、たいへん親しかったから、二人で相談の上、この尾形平馬に頼んで名目上の養子にしてもらったと思われる。こうして会田安明の次男にあたる男の子は、生れてすぐ尾形姓になった。後年この子は、この神官にちゃんと仕送りもしている。ややこしいことである。

佐原・津宮村の安全ネット

二つの村の豪商、伊能家と大川家は、血縁関係こそなかったが一種の経済共同体であった。その上ここには、同学の久保木家と尾形家があつて、この四家の絡み合った人脈の中で、啓次郎は育てられた。

江戸時代の血縁・地縁は、息苦しそうに見えるけれども、落ちこぼれを防ぐ安全ネットをも用意した。またこの二村は、豪商や学者が名を連ねるほど、豊かな土地柄だったということが分かる。

幼い啓次郎は、このネットの上を移動して大きくなった。もちろん漢学は久保木清淵が教え、忠敬は一六歳の啓次郎を内弟子にした。忠敬と治兵衛は兄弟同様の間柄だから、幼い啓次郎にとって忠敬は大伯父さん、妙薫は伯母さんといったところで、佐原の伊能本家・二つの江戸店・深川の隠居宅へたびたび出入りしていたと思われる。

数学については、入門までに身につけていたと思われるが、大谷氏の『伊能忠敬』がいう「会田安明に学んで」いたという証拠は見つか

らなかった。しかし深川の隠居宅や江戸店から、浅草に住んでいた父安明のもとに通つて和算を学んでいたことは当然と思いたい。

近いのだし、数学を教えるくらい、父親の出番があつてもよいのではなからうか。

付録 和算の問題

『算法少女』——初心の手引草 一〇問の内 第七

今あまたの小石あり。是を一よりかそえて。三、五、七、九、と。奇数にて取去れは。余り八十。又二、四、六、八、十、と。偶数にて取去れは。余り四十。惣数を知る術の事。

答 一六八〇

前回の答は九斗四升。

(今回は忠敬自筆の米問題を掲載する予定でしたが、答が書いてなかったので中止にします)

参考文献

- * 『伊能忠敬の科学的業績』 保柳睦美編著 古今書院
- * 『佐原市史』 昭和四一年 佐原市役所編

(あんどろ ゆきこ・「伊能忠敬文書目録」編者)

「山島方位記」の地磁気偏角の解析

—伊能測量時における地磁気偏角の解析についての—

近況と佐渡赤泊、越後寺泊での地磁気偏角の解析—

辻 本 元 博

〈日本地球惑星科学連合二〇〇七年大会地磁気・古地磁気部門で発表〉

地磁気偏角の値は地域により異なり且つ永年変化しますが、伊能測量時の日本の地磁気偏角は大著「伊能忠敬」大正六年での大谷亮吉による江戸深川黒江町伊能隠宅基点の測量方位角から解析以外、正式解析は未了でした。

「山島方位記」全六七冊の記載方位角からの伊能測量時の北海道南岸・本州津軽半島竜飛崎から巖島弥山山上迄の各地・佐渡島・対馬・種子島の地磁気偏角解析結果を平成一九年五月二一日の日本地球惑星科学連合二〇〇七年大会地磁気・古地磁気部門 E111 セッション(幕張メッセ国際会議場二階ホール)で揭示発表を致しました。

同発表の中で大谷亮吉の「伊能忠敬」大正六年の記述を参考にして描いた保柳睦美氏の等偏角線推定図とは大きく異なるものになり、今道修一氏の推定等偏角線図とは基本的に同傾向であるが、北海道等一部にやや大きく異なる部分があることを明らかにしました。当日会場では若手研究者から従来の等偏角線推定図はもはや過去のものになったとの評ももらいました。

会誌「伊能忠敬研究」で佐渡新潟旅行とのかを知りました。

小生は昨年伊能測量時の地磁気偏角解析作業に越後寺泊と佐渡南岸を

大急ぎながら回りましたので少々お伝えします。

〈佐渡小木〉

佐渡南岸は本州の山々を遠距離測量した小木、小木岬、赤岩、赤泊を回りました。

小木周辺では佐渡国小木民俗資料館での丁寧な対応で事前調査した止宿先越中屋武右衛門他の測量基点は詳細位置に若干差異があった為かどうか解析中にばらつきが発生しましたので採用保留としました。

〈佐渡赤泊 止宿 石塚屋は現在の 丸善呉服店〉

赤泊止宿石塚屋清兵衛の位置での解析結果はしっかりと算出ができました。

地元での聞き込みで赤泊の止宿石塚屋(長年代々旅館)は所有者が変わり丸善呉服店になっておりました。丸善呉服店の山側の街道の対側に赤泊の道路元標があります。伊能の測量基点は丸善呉服店の海側で現在では新しく広い道になっておりますが、呉服店の奥様のお話では呉服店前の道路境界線付近が戦後も波打ち際であったが新規に広い道路になり反対側にホテルが建設されたとのことでした。伊能はここから本州の山々を測量しております。

北緯 37. 51. 58.6 東経 138. 24. 33.36 佐渡市赤泊 61

伊能測量日 1803.10.20 の赤泊の地磁気偏角の算出結果は平均 0。

14. 02 西偏

〈寺泊 止宿 興琳寺〉

寺泊での測量基点は興琳寺です。近年有名な寺泊市場からも徒歩で比較的近いところです。旧街道から興琳寺の急階段を登り山門を入り

すぐ左の僅かに小高い位置(石垣上)が測量基点と考えられます。事前に住職様と確認しあったお陰です。

北緯37° 38' 24" 東経138° 45' 58" 長岡市寺泊上片町8105興琳寺

伊能測量日 1803.11.2 の寺泊の地磁気偏角の算出結果は平均 0° 00' 33" 西偏

それにしても三つのことがらを報告しておく必要があります。

① 山島方位記の欠落部分

第三次測量羽越一八〇二年の「山島方位記二」は帰路の男鹿半島船川を最後に日本海沿岸の高田經由善光寺・上田・軽井沢・松井田・江戸深川迄の測量データが何故か欠落しており秋田県南部、山形県、新潟県北部の各日本海沿岸測量のデータが無い。このことは対話の中で会員の谷治正孝様から指摘を給わりお互いになんとも不思議がったものです。中図を見ると日本海岸の各地から男鹿新山、本山、太平山、飛島、栗島、佐渡金北山、鳥海山への遠距離測量による方位線が多く、地磁気偏角解析精度向上には遠距離測量の方位角が大きな決め手となるだけになんとも実に勿体無いことです。(伊能図記載の方位角より「山島方位記」記載の方位角の方が詳細であり偏角の解析は「山島方位記」に限る)

今町湊・寺泊間及び高崎・江戸間は重複した一八〇三年の測量方位角で補うことができます。

② 寺泊止宿

寺泊止宿は一八〇二年は五十嵐武兵衛、一八〇三年は興琳寺ですが、上記欠落の為「山島方位記」に残っている測量データの基点は一八〇三年の興琳寺です。

③ 伊能測量前年の佐渡大地震

伊能測量隊の小木上陸の一年前に佐渡は大地震に遭い、特に小木の西の現在の古小木に有った天然の良港旧小木港は猛烈な海底地盤の上昇により港湾としての機能が不能となり、仕方なく東側の現在の小木港へ移ります。

仮に震災復興は大規模近代施設が密集した現代の様相とは異なっただとしてもそれでも大変な時期に測量隊は小木に上陸したことになります。

(つじもと もとひろ 日本国際地図学会会員)

佐渡赤泊止宿石塚屋清左衛門
(現丸善呉服店)での伊能忠敬測量詳細地点

(海を埋め立てた道路の歩道と車道境界付近が旧海岸線で本州の山々を測量)



越後寺泊止宿一向宗東派彦根山興琳寺境内での伊能忠敬測量詳細地点
(松の木の根元に置かれているのは携帯GPS受信器。これで緯度経度を測定する。)

九州支部例会報告

多彩な「講演」と話題の「伊能大図総覧」をみる

石川 清一

九州支部春季例会が六月三〇日（土）午後一時から五時まで、「福岡市立南市民センター」を会場に開催された。当日はゲスト参加四名を含む十九名の多数の出席がありました。残念だったのは忠敬三女琴さんの子孫奥永渚さんが都合つかなかったことと、本年四月入会の佐賀県の宮地滋さんが直前にケガをして、初出席で張り切っておられたのに、これまた欠席となったことです。



例会は井上辰男さんの司会のもと、最初に私から支部長報告を行い、星堃代表理事からの「九州の元気な活動は大変貴重だ」との激励のメッセージを披露後、六月開催の本部総会等の報告を行った。

続いて講演の部に入り、トップバッターは国土地理院九州地方測量部長の菱山剛秀氏で本年四月着任後多忙のなか快く承諾頂いた。

演題「江戸時代の測量術について」は先ずオランダから輸入された江戸時代の測量術について概括され、その江戸時代の先端的測量術を忠敬は駆使しているがそれ自体は特別なものでなく、むしろ徹底した誤差の排除と、天測による位置確認に特徴があるのでは、とのこと。

続いて講演（二）は北九州市立自然史・歴史博物館歴史課長永尾正剛氏による「古地図にみる小倉の城下町」をテーマにスライドを使い近世以前の小倉と、慶長五（一六〇〇）年細川、その後の譜代小笠原氏の小倉入部と続く江戸時代の小倉城下町の変遷をわかりやすく説明された。伊能忠敬の九州測量の際必ず止宿した大阪屋宮崎良助宿に近い小倉常盤橋周辺や紫川は当時の古地図で大変興味深かった。講演（三）は、会員国重正樹氏の「青柳種信著『筑後国一條原石人図考』の一考察」で、昨年伊能陽子、安藤由紀子両先生により編集発行された積年のご労作、『世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書』目録にある資料をもとに論究したもの。国重氏は長年勤務した公務員を定年前に退職し母校の修士課程で青柳種信研究のかたわら取上げた。なお青柳種信（福岡藩士・国学者）は伊能忠敬の福岡藩内測量の際、藩命で案内役（数人の内の一人）になり忠敬先生のご下問に的確な答えで、その学識を誉められた人物。

なお、講演（二）後の休憩ののち、今話題の河出書房新社版『伊能大図総覧』を全員で拝見した。購入者穂吉正明氏が我々の閲覧希望を快諾され、当日は経営している西日本測研社の方共三人で遠路北九州市から車で運んで頂きご厚意に感謝々です。なお穂吉さんはこれを私

蔵するのはもったいないので

今後適当な時期に北九州市の公的な図書館に寄贈し多くの方に役立てたいお気持ちのようです。今回四〇分間と短時間だったので再度見たいとの声が多く後日を計画している



ところですよ。

例会の最後に毎年の秋の研究旅行が長崎県島原市に決まり、島原市在住の松尾卓次氏から訪問予定先の紹介があった。一ヶ所は「本光寺」

―収蔵物①混一疆理歴代国都之図②日本大地図。もう一ヶ所は「島原

二つに分かれていたところ

図書館―収蔵物①一里四寸領内図の一部②島原領内地図③三倉村地図。島原は伊能図探究に欠かせないところ、大いに期待したい。余談ですが『混一疆理歴代国都之図』は京都の龍谷大学にもあり二〇世紀初めに発見され注目されていたようですが、近年の一九八八年になって島原の今度行く「本光寺」(この寺は島原藩主松平氏の菩提寺)にも発見され、当時話題になりました。本年六月に、「モンゴル帝国が生んだ世界図」ということでこの二つの図を中心に論究した著作が刊行されており、この地図も私の関心をひくところですよ。

例会終了後近くに場所を移し五時半から懇親会を行った。野田茂生さんの進行で、先ず遠路佐世保市から出席の平川定美さんの乾杯で開宴し、ゲスト参加(昨年に続き)浜本隆さんの自己紹介や、先般の東京での総会に出席した河島、馬場両氏の感想や、中富、原口、松尾(紀)各氏はじめ全員からスピーチがあり、いつもながら賑やかで時間のたつのを忘れる思いでした。夜八時半熊谷要平さんの中締めでおひらきとなり、大いに忠敬友達を実感した一日でした。皆さんおつかれさまでした。

(いしかわ せいいち 九州支部長)



―19名の忠敬友達が集った伊能忠敬研究会九州支部例会―

参加者 (前列左から) 野田茂生、松尾紀成、松尾卓次、穂吉正明、石川清一、中富道利、河島悦子、平川定美(後列左から) 山下浩司、原口光和、浜本隆(ゲスト参加) 県立筑紫中央高校、米倉隆盛(ゲスト参加) 井上氏知人、植村幸男(ゲスト参加) 西日本測研社、熊谷要平、縄田剛(ゲスト参加、西日本測研社)、馬場良平、国重正樹、遠藤薫、井上辰男(敬称略)

忠敬小倉顕彰会

第五回「伊能忠敬献花の集い」

石川 清一

去る九月二六日、毎年恒例の第五回「献花の集い」が、北九州市小倉の紫川にかかる木の橋「常盤橋」忠敬記念碑前広場に於いて、行なわれました。

当日は晴天に恵まれ、三〇度を超える真夏を思わせる暑さでしたが、顕彰会関係者、来賓、一般参列者等六〇名余の出席を得てとどこおりなく進み、式典は一六時三〇分、地図の俵ゼンリン社員三名扮する忠敬と測量隊員一行が、川向こうから橋を渡り会場に到着後開始になり、最初に物故会員に黙祷をささげたのち、顕彰会穂吉会長の挨拶、来賓を代表し国土地理院九州地方測量部菱山部長、地元北九州市北橋市長の祝辞があり、続いて伊能家七代目伊能洋様ご夫妻、当伊能研究会星桠代表理事からの祝電が披露されたのち献花にうつり、一般参列者を含め出席者全員が忠敬先生の顕彰記念碑に菊花の献花を行った。

会場周辺は報道関係者も多数集まり、TV局、新聞社の報道陣のシャッター音でしばしば大にぎわいでした。

続いて近くの商店街にある「つじり茶屋」に会場を移し、一七時過ぎから第二部の講演会、一七時四〇分から第三部懇談会となり、今年も盛会裡に終了しました。

(いしかわ・せいいち 九州支部長)

第五回伊能忠敬「献花の集い」ポスター

はじめて
実測による日本地図を作った偉人

第5回 **伊能忠敬**
『献花の集い』

■平成19年9月26日(水)
16:30~(雨天決行)
■常盤橋広場
伊能忠敬記念碑前
つじり茶屋本店
小倉北区魚町1-2-11



伊能忠敬記念碑の存在を認知。観光都市北九州・小倉のまちづくりにお役立ちします。

長崎街道
大里・小倉と
筑前六宿
内宿通り底井野往還

贈呈 伊能忠敬小倉顕彰会 会長
株式会社日本測研社 穂吉 正明



北橋健治・北九州市長



穂吉正明・伊能忠敬小倉顕彰会々長

「起点」で偉業たたえる 小倉 伊能忠敬献花の集い

「第5回 伊能忠敬献花の集い」
が26日、小倉北区の紫川・常盤橋たもとに開催されている。

伊能忠敬の旅姿にふんした伊能忠敬九州測量隊が測量御用と書いた旗を掲げて常盤橋を渡り、橋の東側にあったもの記念碑前であつた。江戸後期の寛政12(1800)年から17年をかけて全国を測量し、正確な日本地図を作った伊能忠敬の偉業をたたえ、出席者が献花した。

伊能忠敬は、九州5街道の起点である常盤橋から九州全土の測量を始めたといわれ、「伊能忠敬小倉顕彰会」(穂吉正明会長)が、03年から集い

る記念碑横に着席。穂吉会長や来賓のあいさつに続き、伊能忠敬測量隊や顕彰会会員、市民らが次々に献花した。

【木村雄峰】



記念碑のある常盤橋たもとに到着した「伊能忠敬一行」

毎日新聞 2007年9月27日

伊能忠敬の偉業 観光振興に一役 九州測量の出発点で献花

小倉北区
伊能忠敬の九州測量隊にふんしたゼンリン社員らも献花した



江戸時代の測量家、伊能忠敬の偉業をたたえ、記念碑の存在をもっとアピールしようと、五年前立てる「伊能忠敬献花の集い」が26日、小倉北区京町の常盤橋たもと「測量二百年記念碑」の前で開かれた。

伊能は九州測量にあたり、常盤橋ではの旅館に一週間滞在し、常盤橋から測量に出発したとされる。二〇〇一年九月二十日、六日、伊能の測量開始から二百年を記念して記念碑の存在を多くの人に知ってもらうため、地域活性化や住民らに「伊能忠敬小倉顕彰会」(穂吉正明会長)が、03年から集い

今年も盛大に行われた「献花の集い」で忠敬先生の顕彰記念碑に菊花を献花するゼンリン社員。常盤橋周辺はTV局や新聞社報道陣のシャッター音でしばし大にぎわいでした。

西日本新聞 2007年9月27日

お便りから

年末恒例の第九、ベートーベン作曲交響曲第九番（合唱付）が、日本では何故か年末になると

全国あちらでもこちらでも演奏されます。しかもその合唱部分は長大で三〇分近くもかかりますが、（全曲では一時間を超えます）その殆どが各地地元の市民によつて歌われています。日本の第九発祥の地といわれる鳴門に行つてきました。ここは第一次大戦中捕虜となつて収容されてゐたドイツ兵が大正七年六月一日地元との交流の中でこの曲を演奏したのが日本初演といわれています。歌つてきました。二〇〇七年六月三日、さすがは発祥の地といわれるだけあつて、北は北海道から南は九州まで、来るは来るは、六〇〇人の善男善女による大合唱と徳島交響楽団（二〇〇人）が鳴門市文化会館ホールで、広くもない舞台にひしめき合つて「歓喜の歌」をめでたく歌いあげました。

日々の話題

■論文掲載 佐久間達夫さんの論文「伊能忠敬測量隊の東京多摩地

区測量」が「多摩のあゆみ」に掲載されました詳細は三六頁をご覧ください。



柏木隆雄 詩の世界「ふるさとを詠う」コンサ

ートが開催されました。水郷・佐原の風景を歌ったコンサートは新聞でも取り上げられ、同時にCDや抒情曲集「ビオーネ」も刊行されました。



故郷への思い
歌声に乗せて

生まれ居るの風景を、ひと空に（の）地を奪うとして、
と、樹根と土を何処かの山に運搬するで、山頂の頂には
標高の数字と「さくら木」の樹の絵が、空中に作られ
て居る風景の中に、空を飛ぶ「さくら木」の絵が、空
を飛ぶ風景の中に、空を飛ぶ「さくら木」の絵が、空
を飛ぶ風景の中に、空を飛ぶ「さくら木」の絵が、空

11日コンサート



「おれは結婚を断つた」といふ
相澤誠蔵さん。市川右太衛門さんと

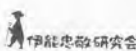
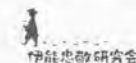
ちば
首都圏

[illegible]

千葉市内

柏木隆雄さんから研究会の新しいロゴマークが

紹介されました。佐渡研修旅行の「旅のしおり」表紙にも早速登場しました。



お知らせ

■八王子夢美術館
☎042・621・6777

12
•
7
{
2
•
3
林靜一展

■セミナー『五五歳から本当に生きた伊能忠敬』

講師 矢能彰氏（伊能忠敬研究会会員）

日時 平成20年1月23日(木)・30日

(木)・2月6日(木)

会場 埼玉県民活動総合センター

問い合わせ先 (財) 生きいき埼玉

048・728・7112 (小堀)

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

ー予定ー

発表誌 原則として年四回

第51号 締切12月末 発行2月

②例会・見学会の開催

第52号 締切3月末 発行5月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第53号 締切6月末 発行8月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9756/2

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

（07年8月よりアドレスが変更しました）

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にて一任下さい。手書き、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。併せて、話題、情報、近況などのお便りお待ちしております。

伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadtaka.org/>

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊

能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

<http://www.tt.rim.or.jp/koko>

編集後記

◇大友正道氏逝く。ホームページビルダーという便利なソフトもなかった当時、苦勞しながら伊能研究会の初代ホームページを立ちあげてくださった。秋葉原へ部品を買に行ったという文字通りの手作り。それだけホームページには愛着を持っておられ、月ごとのヒット数を記録し来訪者が多かった月は嬉しそうに多かった理由を解説された。富岡八幡宮から江戸東京博物館への道を歩いたウォークのとき、沿道の古いビルを見て「懐かしいなあ」。若い時分にこの地区の再開発に携わったとのこと。氏の年齢を感じさせない理科系的エネルギーの源を感じた。一方、ライフワークのしめなわ研究。大阪への研修旅行の際には別行動で神社へ。外国製らしき革製のリュックを背に、「一の宮巡り朱印帳」を携え颯爽と出かけて行った姿が今でも記憶に残る。私は今年六月東北に旅行した際、弘前近郊で超豪華なしめ縄を見つけ、写真をお友氏に送信した。「津軽地方のしめ縄の特徴をすべて備えている」と喜ばれ、遺作となった『しめなわ百科』に掲載してくださった。あのお顔、あのお声に再びお会いできないのが残念でならない。（合掌）◇事情により会報発行が大幅に遅れたことを深くお詫びいたします。

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.50 2007



50TH COMMEMORATIVE EDITION		
Progress Report about "The Inoh Tadataka Journal"	Watanabe Ichiro	1
Message of Congratulation on 50th "The Inoh Tadataka Journal"	Hoshino Yoshihisa	2
My Impressions on 50th "The Inoh Tadataka Journal"	Inoh Hiroshi	7
Editors' Reminiscences about "The Inoh Tadataka Journal"	Inoh, Ando, Fukuda	8
FEATURE ARTICLES : STUDY TRIP TO SADO		9
Report of Study Trip to Sado	Yamamoto Kimiyuki	10
Memories of Study Trip to Sado	Nakagawa Sachiko	14
My Personal View about Old Maps owned by Ishii Natsumi	Takagi Takayoshi	18
FROM VISITORS' REGESTERS	Inoh Yoko	20
TOPICS Introduction; Haruka, a Young Scholar	Editorial Department	22
The 100th Anniversary of Enomoto Takeaki's Death	Itoh Eiko	24
Exhibition and Lecture of "The Survey of West Japan "	Saitoh Hitoshi	26
"Exhibition of Maps 2007" in Toyama	Kawasaki Michiyo	27
5,000 Books of The Inohs Collection(2)	Sakuma Tatsuo	28
Place Names and Landscapes in " <i>Inoh Daizu Soran</i> " (4)	Hoshino Yoshihisa	37
Memorial Piece to Mr.Otomo	Fukuda Hiroyuki	45
ARTICLES Mamiya Rinzo and Background of Siebold Affair (1)	Otani Tsunehiko	46
An Old Book about Tadataka Inoh(2)	Akima Minoru	54
Personal Connections of "Wasan " (2)	Ando Yukiko	60
Analysis of Declinations in " <i>Santoh-Houi-ki</i> "	Tsujimoto Motohiro	66
BRANCH REPORT General Meeting of Kyushu Branch	Ishikawa Seiichi	68
"The Offering Flowers Meeting"by Kokura-Kensyokai	Ishikawa Seiichi	70
MEETING ROOM		
Letters from Members	Daily Topics and Informations	72
	Editorial Department	

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY